【完結】坂井悠二の恋人ヒライ＝サン【転生】

器物転生

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

坂井悠二に助言をして、いろんな人から不審に思われる話です

目次

はじまり ―― 1
狩人フリアグネ（上） ―― 11
狩人フリアグネ（下） ―― 22
屍拾いラミー ―― 30
愛染の兄妹 ―― 41
万条の仕手ヴィルヘルミナ ―― 53
おわり ―― 62

はじまり

僕の属しているクラスには、変わった女の子がいる。入学式から今日で一週間、ずっとジャージの体操服を着ている女の子だ。入学式の時は、ちゃんと女子制服を着ていた。でも、そういう行事以外の時は、いつもジャージの体操服を着ている。登下校する時だって体操服のままだった。

長袖のジャージだから、見ていると暑苦しい。いつも体操服を着ているから運動の好きな人なのかと思ったけれど、そんな事はなかった。休み時間や昼休みになると、図書室から借りた本を読んでいる。むしろ運動は好きではないらしく、必要がなければ動き回ることはなかった。

他人と会話する事も少なくて、下手すると一度も喋らないまま一日を終える事もある。友達が居るのかも怪しい。部活にも入っていない。もしかして彼女は、一人ぼっちなんじゃないかな。それが、ちょっと気になって彼女の様子を探っていた僕の感想だった。そんな彼女の名は「平井ゆかり」という。

「平井さん、いつもジャージで暑くない？」

黙々と本を読む平井さんに、僕は声をかける。すると平井さんは僕を無視する事なく、本から顔を上げた。その顔に笑みはなくて、無表情で、睨んでいるようにも見える。正直に言うと、ちょっと怖かった。もしかして怒られるんじゃないかと思った僕だったけれど、平井さんは意外にノリノリで答えてくれた。

「いいや、暑くはない。汗もかいていないだろう？　信じられないと言うのならば、オレの肌に触れてみると良い。汗をかいているのならばベタベタで、汗をかいていないのならばスベスベのはずだ。こんな事を言った後で、お前に無理矢理さわられたなんて言わないから、オレの体に触れてみるといい」

「いや、それは止めておくよ。恥ずかしいし」

平井さんは男っぽい喋り方だ。おまけに自分の事を、男の子のように「オレ」という。それは平井さんが女子制服を着ない事と関係があ

るのだろう。もしかすると平井さんは、女の子の格好をすることが嫌いな人なのかも知れない。でも、仕草は女の子らしいから、決め付ける事はできなかった。

「遠慮しなくてもいいぞ、坂井悠二。お前も機会があれば、女の子の肌に触れてみたいと思っている事だろう。なんだったから、オレの小さな胸で良ければ触ってもらっても構わない。触って減るものではないから、気にする必要もない。ほら、手を貸せ。オレがリードしてやる」

「そんなこと思ってないよ!?」

平井さんは僕の手を引っ張る。そのまま自分の胸に、僕の手を押し付ける気なのだろう。それに抵抗する僕だったけれど、平井さんは意外に力が強くて逆らえなかった。そのまま僕の手は、平井さんのジャージに接触する。ジャージのガサガサとした荒い感触の奥に、フニャッと少し硬めの感触があった。

「うわあああああ!?」

悲鳴を上げたのは平井さんではなく、僕だった。平井さんの胸に接触していた手を、僕は慌てて離す。それは僕の火事場の馬鹿力が発揮された訳ではなく、平井さんが手を離したからだった。急に手を離された僕は、反動で体勢を崩す。間抜けにも、他のクラスメイトも見ている前で、悲鳴を上げて、床に尻もちをついた。

「――お前は、かわいいな」

大きな物音を立てた僕に、クラスメイトが注目する。ザワザワという話し声が、一時的に止んだ。そんな他人の視線が集中する中、平井さんは呟く。「呟いた」と言っても、僕にしか聞こえないほど小さな声だった訳じゃない。僕に伝わる程度の声だったけれど、一時的に音の止んだ教室ではクラス中に届いていた。

「お前の悲鳴を聞くとゾクゾクする。クセになりそうだ……そこで提案があるのだが、オレの恋人にならないか。悪いようにはしない。お前が望むのならば、オレの体を使って気持ちよくしてやる。先に言っておくが、これは冗談じゃない。本気（マジ）だ。本気でオレと恋人にならないか？」

「え?」
　どうやら僕は、眠れる獅子を起こしてしまったらしい。まさか平井さんが、こんな性格だなんて思わなかった。世に言う肉食系女子というのは、平井さんのような人の事を言うのだろう。「ドS」という言葉が浮かび上がったものの、その不穏な単語は脳内から削除された。現実逃避だ。
　ところで僕は、とつぜん告白されてしまった。現在進行形で、告白されている。あまりにも突然な話で、僕は混乱した。告白の時も平井さんは無表情で、冗談の気配は欠片もない。そもそも冗談という可能性は、平井さん自身が否定している。僕こと坂井悠二にとって、人生で初めて受けた、真剣の告白だった。
「オレと結婚しよう」
「話が飛躍してる!?」
　僕が答えに悩んでいる間に、事態は悪化していた。立ち上がろうとしていた僕は、平井さんにガシッと両肩を掴まれる。そのまま立ち上がれなくなった。今にも食われそうだ。告白を受け入れるか、受け入れないか。そんな事を言われても、すぐに答えは出せない。とりあえず、考える時間が欲しかった。
「平井さん。答えを返す前に、ちょっと待ってくれる?」
「なるほど。では、論理的に考える材料を渡しておこう。オレは特別な事情から、男性意識と女性意識の両方が抑圧される事なく成長している。本来ならば自身の性別によって、相反する意識は抑圧されるものだ。だが、かつてオレは男性であり、いまは女性となっている。とは言っても性転換した訳ではなく、例えるならば「他人から男性として扱われていた時期があった」と言うだけの話だ。お前がエッチな事をしたいと思えば、肉体的に女性として受け入れられるから安心しろ。
　そこで相談だ。このままでは男性意識も女性意識も発達せず、精神的に男でも女でもない状態に陥るだろう。男性を愛そうとすればオレの男性意識が拒絶し、女性を愛そうとすればオレの女性意識が拒絶する。下手するとオレは、人を愛せなくなってしまうかも知れない。

男にもなれず、女にもなれない。
そこで、お前の出番だ。お前とオレが恋人になって、オレの女性意識の発達を促進する。そうすれば男性意識を抑圧し、オレは女として生きる事ができるだろう。女としてのオレを肯定できる。だから、どうかオレに協力してほしい。どうかオレと恋人になってほしい――オレを助けてくれ、坂井悠二。
もちろん、それだけが理由じゃない。お前を好きな気持ちは本当だ。たった今ではなく、ずっと前から、この世界に生まれる前から、お前に好意を抱いていた、これはウソじゃない」
そう言って平井さんは、僕の肩から手を離す。そして呆然としている僕の体を抱き締めたまま持ち上げると、そのまま僕の体を立たせた。僕が自力で立てる事を確認すると、荷物を纏めて去って行く。もうすぐ次の授業が始まるのに、平井さんはカバンを持って帰ってしまった。
平井さんの告白は、あまりにも重すぎた。平井さんの落とした爆弾は、クラスの皆にも大きなショックを与えている。もしかすると平井さんは、ずっと我慢していたのかも知れない。ずっと我慢していた平井さんに、僕の言葉の何かが触れて、爆発させてしまったのかも知れなかった。
「坂井、相談するなら乗ってやる」
救いの手を差し伸ばしてくれたのは、僕と同じ中学校出身のクラスメイトだった。どうすれば良いのか分からない僕にとって、その優しさは有り難かった。リーダーの池速人を中心に、女子生徒陣にも話を聞いて、平井さんの話を纏める。平井さんの現状を理解すると、対策が話し合われた。
平井さんに告白された次の日、いつもと変わらず平井さんは登校していた。今日は何時もより多くのクラスメイトが、朝早くから登校している。友人の池速人から「平井さんを待たせるな」と助言された僕は、授業が始まる前に答えを返す事になった。僕は平井さんを教室から連れ出して、人気のない場所へ向かう。でも、僕達の後ろから複数

の足音が聞こえるのは気のせいだろう。きっと気のせいに違いない。
「平井さん。僕は、平井さんを助けたい」
「安心しろ、坂井悠二。悪いようにはしない」
恥ずかしくて固まっている僕に、平井さんは近づく。そうして平井さんは、僕を抱きしめてギュッとした。昨日は少しだけ感じていた胸の感触が、ダイレクトに伝わってくる。本来ならば抱き返すべきなのだけれど、女の子の感触に僕は身を固くしたまま動けなかった。すると、そんな視界の端に、壁から身を乗り出して様子を探っているクラスメイト達の姿が引っかかる。
「では、さっそく恋人らしくキスをしようか。はい、ちゅー」
「止めて、平井さん！　みんなに見られてるからー！」

こうして僕は、平井さんの恋人になった。

※彼女は坂井悠二の妄想ではありません

【裏】

オレには前世の記憶があった。記録ではなく、記憶だ。単に記録として魂に刻まれているのではなく、夢の中で前世を追体験した。オレは彼であり、彼女でもあった。ある時はノリノリでラスボスをやっていたり、世界を滅ぼしたりと、自重の欠片も存在しない有り様だ。そして今世で生きた時間の数千倍に相当し、体感数万年に及ぶ追体験を終えると、オレは前世の力を身に付けていた。
世界を滅ぼしかねない力じゃないですかー！　やだー！
こんな物騒な力いらねー！　捨ててやるー！　と思ったものの、ＯＦＦにする機能はないらしい。おい、オプションくらい、ちゃんと付けろよ。バカじゃねーの、バーカバーカ！　初期のゲームのように、ＳＴＡＲＴの選択肢しか存在しない。ＬＯＡＤの選択肢もなかったけれど、タイトルロゴが出る前に「自動で強制的に」追体験させられたのは記憶に新しい。その代わりとして複雑な操作は必要なく、脳内のみでＯＮ／ＯＦＦできる親切設計だ。そんな訳でオレは、能力を暴

発させる危機に怯える事になった。
転生者として魂の弄り方は分かっている。他人の体から魂を切り離す事さえ簡単だ。だが、オレに自身の魂を弄る権限は与えられていない。転生者としての魂が改変されないように、頭のネジが飛んでいるレベルのプロテクトが施されている。分かりやすく言うと、セキュリティを強固に設定しすぎて、自分でもアクセスできない状態だ。だから転生システムをアップデートできず、オプションなどの新機能の追加もないらしい。オワタ。
そうなったオレに最も必要だったのは、クールになる事だった。うっかり怒って感情を露わにすると、勝手に能力が発動する。とても空腹を感じていると、形容し難い触手のような物がオレの体から生えて、近くにある物を捕食しようとする。邪神様、どうか大人しく眠っていてください。できれば永久に。
そんな訳でオレは、大人しい子供だった。いつも本を読んでいる子供だった。もちろん外界から意識を逸らし、精神に余計な刺激を与えないためだ。精神が不安定だった時は周りで不幸な事故が起こっていたけれど、今は安定しているため死人も出ない。植物のように穏やかな人生をオレは望む……はっ、いかん。これは爆破殺人鬼のセリフじゃないか。オレはラスボスになんてならんぞー！
ところで、オレの氏名である「平井ゆかり」と現住所の「御崎市」を合わせて脳内検索すると、「灼眼のシャナ」がヒットする件について……よりにもよって危険度の高い世界じゃないですかー!? 別世界から人食いモンスターがやってきて、おまけに時止めみたいな術を使って、人間社会に気付かれる事なく活動している世界だ。そして「御崎市」は将来、何度も消滅の危機に陥る。
こんな町に居られるかー！ オレは出て行くぞー！ と思ったけれど、両親は御崎市に居て欲しいと思っている。この身に宿すチートを使わない限り、チキンなオレは御崎市を出て一人暮らしなんてできない。どうやらオレが市外で結婚して、そのまま帰ってこない可能性を心配しているらしい。
そんな訳で、オレは地元の高校に進学した。ヒロイン兼ラスボスの

坂井悠二殿と同じクラスだ。坂井くんガンバレ超ガンバレ、世界の命運はお前にかかっている。どうかオレの記憶通りに、この御崎市を危機から守ってくれ。もしもオレが「都喰らい」なんかに巻き込まれたら、自動迎撃機能で世界の寿命がマッハだから。

「平井さん、いつもジャージで暑くない？」

と思っていたら、なぜかヒロイン様がオレに話しかけてきたァァァ。アイエエエ、ナンデ!?　落ち着け、クールになれ！　ＦＯＯＯＯ、ＫＯＯＯＬ！　なんで、いつもジャージなのかって？　手足の毛が濃くて気になるからだよ！　女子制服なんてゴミ箱にシュウウウト！　超エキサイティン！

「いいや、暑くはない。汗もかいていないだろう？　信じられないと言うのならば、オレの肌に触れてみると良い。汗をかいているのならばベタベタで、汗をかいていないのならばスベスベのはずだ。こんな事を言った後で、お前に無理矢理さわられたなんて言わないから、オレの体に触れてみるといい」

「いや、それは止めておくよ。恥ずかしいし」

オレは何を言ってるんだ？　坂井悠二殿も引いてるじゃないか１？　うっ、いかん。オレの中の邪神が暴れ始めやがった！　カオスだ！　はやくオレから離れろー！　命はないぞー！　落ち着け、坂井悠二殿が話しかけてきた、それだけの事じゃないか。ここはクールに言葉を返すんだ。

「遠慮しなくてもいいぞ、坂井悠二。お前も機会があれば、女の子の肌に触れてみたいと思っている事だろう。なんだったから、オレの小さな胸で良ければ触ってもらっても構わない。触って減るものではないから、気にする必要もない。ほら、手を貸せ。オレがリードしてやる」

「そんなこと思ってないよ!?」

ノリがいいな。さすが坂井悠二殿。ヒロインだから心も広い。主人公のチビジャリには勿体ないな。そう思いつつオレは、坂井悠二殿の手を引っ張ってオレの胸に当てる。オレは「男性だった前世」も追体験しているから、男性の気持ちは分かる。オレの胸で良ければ触ら

れても構わない。同じ男性だろ！　遠慮するなよ！
「うわあああああ!?」
あっ、今は女性だった。と思った時には遅く、坂井悠二殿は悲鳴を上げていた。触った側なのに悲鳴を上げるなんて、なんというヒロイン力！　パないの。そんな坂井悠二殿を見ていると、「女性だったオレ」が涌き上がってくる。そのオレは坂井悠二殿の悲鳴を心地良いと思った
「――お前は、かわいいな」
たまらん。
「お前の悲鳴を聞くとゾクゾクする。クセになりそうだ……そこで提案があるのだが、オレの恋人にならないか。悪いようにはしない。お前が望むのならば、オレの体を使って気持ちよくしてやる。先に言っておくが、これは冗談じゃない。本気（マジ）だ。本気でオレと恋人にならないか？」
「え？」
ふと、窓の外を見ると、端の方に得体の知れない触手のような物がウニョウニョと視界に入った……はっ、いかん！　精神が汚染されている！　気を確かにするんだ！　このままでは触手でペロリと、坂井悠二殿を美味しくいただいてしまう。おそらく性的な意味でも、食的な意味でも。
「オレと結婚しよう」
「話が飛躍してる!?」
ところで何の話だったか。触手の話だったか。ジャージの話じゃなかったっけ？　魂に自動保存されているログを参照すると、告白の話だった……なんでや！　いや、待てよ。これは良い手かも知れない。坂井悠二殿と仲良くしていれば、生存の可能性は高まるだろう。危なくなったら守ってくれるかも知れない。そうと決めたオレは、論理的に攻める事にした。
「平井さん。答えを返す前に、ちょっと待ってくれる？」
「なるほど。では、論理的に考える材料を――
（かくかくしかじか）

――もちろん、それだけが理由じゃない。お前を好きな気持ちは本当だ。たった今ではなく、ずっと前から、この世界に生まれる前から、お前に好意を抱いていた、これはウソじゃない」

うん、ウソじゃない。少なくとも今のオレじゃない前世の誰かさんは、坂井悠二という存在に好意を抱いていた記憶がある。長く生きて……じゃなくて存在していれば、そんな事もある。オレ？　オレも好意を抱いているぞ。坂井悠二がオレの役に立ってくれそうだからな！

そこでオレは気付いた。今の告白はクラス中に見られている……はっ、恥ずかしい。そう思ったオレは、早退する事にした。こんなに注目された状態が長く続いたら、平常心を失ってクラスメイトをペロリしちゃう恐れがある。途中で担任の教師に早退を伝えに行ったら「ああ、窓に！　窓に！」なんて言い始めたけど、すぐに椅子で殴って気絶させたので大丈夫だろう。セーフセーフ。

そして次の日、オレは坂井悠二に連れ出された。いつもならば登校していないクラスメイトがゾロゾロ付いて来ているけれど、アーアーきこえなーい。きっとオレの妄想だろう。告白の返事なんて大事件に、オレは興奮して幻聴が聞こえているのかも知れない。もしも坂井悠二がオレの告白を断ったらオレの意思に関係なく、その場で坂井悠二はペロリされちゃうかも知れないな。

「平井さん。僕は、平井さんを助けたい」

えっ、ちょっと意味が良く分からない。ここは「ＹＥＳ」か「ＮＯ」を答える場面じゃないのか？　坂井悠二の返答はＹＥＳでもＮＯでもない、ベターな選択肢だ。さてはクラスメイトの入れ知恵か。後ろの壁から顔を覗かせているのは吉田一美だ。お前かー！　でか乳ー！

「安心しろ、坂井悠二。悪いようにはしない」

オレは坂井悠二をガシっと抱き締める。そして吉田一美をフフンと見下した。すると吉田一美の後ろにいた女子生徒陣までオレに敵意を向ける。あっ、やべっ、女子生徒陣が敵に回った。オレは人付き

合いが悪いから、女子生徒に味方なんていない。いーもんねー、オレには坂井悠二が居るからいーもんねー。
「では、さっそく恋人らしくキスをしようか。はい、ちゅー」
「止めて、平井さん！　みんなに見られてるからー！」
見せつけてやるのさ！

狩人フリアグネ（上）

――無限の時が鼓動を止め
――人は音もなく炎上する
――誰ひとり気付く者はなく
――世界は外れ
――紅世の炎に包まれる

「平井さん」
「なんだ？」
「それって何の詩？」
　アニメ版『灼眼のシャナ』のアバンタイトルで、オープニングが始まる前の前口上だ。あの歯車が組み合わさった奇怪な物体が例のアレだとは、本編中で演出されるまで気付かなかった……なんて事は坂井悠二に言えない。華麗にスルーしよう。そうしよう。どうせ本編が始まれば、この詩の意味は理解できる。
「坂井悠二、化け物に食われたくなければ人の多い場所は避けろ。特に、学校帰りの商店街は危険だ」
「？」
「いや、もう手遅れかもしれないが」
　オレの警告に坂井悠二はキョトンとしている。近い内に坂井悠二は、化け物と出会う。そこで炎髪灼眼と出会って、すでに自身が死んでいる事を知るだろう。とは言っても、今オレの目の前にいる坂井悠二が、死んでいるのか否かは分からない。チートを使えば分かると思うものの、ただ調べるだけでは済まず、坂井悠二の内蔵が裏返って変死体となる恐れがあった。
「化け物は人を食べる。そして効率的に多くの人を食べるために、商店街などの人の集まる場所へ現れる。むしろ人気の少ない場所の方が安全だ」
「うん、分かった。気をつけるよ」
「そうか。では、さよならだ坂井悠二」
「うん、さよなら平井さん」

学校からの帰り道、オレは坂井悠二に別れを告げる。もしも坂井悠二が化け物と出会わず、炎髪灼眼とも会わなければ、どうなる？　化け物の策に気付けず、御崎市終了のお知らせだ……あれ？　やばくね？　余計なこと言っちゃった？　慌てて振り返ると、まだ坂井悠二の背中が見えた。おｋ、まだ間に合う。オレは坂井悠二を追いかけた。
「どうしたの、平井さん？」
「お前の中には宝が隠されている。世界の真実を知りたければ、自ら向かうのも手だ」
「？」
「今は分からなくてもいい。いずれ分かる」
　我ながら意味不明だ。坂井悠二もハテナマークを浮かべている。困った事に、急な事で上手いセリフを思いつけなかった。まあ、原作のある世界は、なぜか知らん原作沿いに展開するものだ。因果とか世界線とか、難しい事は分からない。そんな事を素人が考えても仕方のないことだろう。オレは魂の専門家(技術屋)であっても、科学者じゃない。
【表】
　平井さんは不思議な人だった。学校からの帰り道で、平井さんは聞いた事のない詩を呟く。何の詩か聞いた僕だったけれど、教えてもらえなかった。その代わりとして「化け物が出る」だなんて、そんな事を平井さんは言う。平井さんの無表情もあって、冗談か本気か分からなかった。
　でも、その時の僕は冗談だと思っていた。平井さんの言葉を軽く受け止めて、いつもの通学路である商店街を通った。その先にある交差点で、僕の日常は崩壊する。地面に火線が走り、世界が薄白い炎に包まれた。そこへ２体の化け物が現れて、人から立ち昇る炎を食べている。
　――無限の時が鼓動を止め
　――人は音もなく炎上する
　僕以外の人々は、時を止められていた。歩き出そうとして足を上げたまま、空中に不自然に足を止めて、そのまま地面へ下ろされる事が

ない。そんな止まった人々から立ち昇る炎は、化け物の口へ吸い込まれて行く。その光景に得体の知れない恐怖を感じて、僕は吐き気を覚えた。

――誰ひとり気付く者はなく

――世界は外れ

――グゼの炎に包まれる

平井さんの詩が思い起こされる。グゼ？　グゼとは何だろう？

どうして僕は、平井さんに詳しく話を聞かなかったのか。グゼとは、あの化け物の事なのか。そもそも、なぜ時が止まっているのか分からない。時を止めるなんて、そんなに簡単に出来るものなのか。ありえない。

その有り得ない光景を見ているのは僕一人だ。どうして僕に限って動けるのか分からない……ああ、そうか。僕は外れてしまったんだ。世界から外れてしまった。そこに優越感はなく、あるのは孤独感だった。世界に一人、残されてしまった。今すぐ、みんなに会いたくてたまらない。

『坂井悠二、化け物に食われたくなければ人の多い場所は避けろ。特に、学校帰りの商店街は危険だ』

『化け物は人を食べる。そして効率的に多くの人を食べるために、商店街などの人の集まる場所へ現れる。むしろ人気の少ない場所の方が安全だ』

なぜ僕は平井さんの言った事を。もっと真剣に考えなかったのだろう。なんて思っても手遅れだ。こんな事になるなんて誰にも予測できなかった……いいや、平井さんに警告されたじゃないか。僕は商店街を避けて遠回りするという選択も出来たけれど選ばず、こんな世界に踏み込んでしまった――こんな非日常に。

『こいつ、「ミステス」！』

『ミステス？　あの宝物が入っている「トーチ」？』

『えぇ。それも飛びっきりの変り種。久しぶりのお土産ね。ご主人様もお喜びになるわ』

巨大な赤ん坊のような、赤ちゃん人形のような化け物が、その大き

な手を僕に伸ばす。あまりの恐怖に、僕は身動きできなかった。でも、僕を掴もうとしていた化け物の手は、紅蓮の少女によって切り落とされる。化け物は、その少女をフレイムヘイズと呼んだ。グゼ、ミステス、トーチ、フレイムヘイズ……分からない言葉ばかりだ。

「お前は人じゃない。お前だけじゃなく、体の中に灯りが見えるヤツは皆そう。紅世の徒（ともがら）に存在を食われて消えた人間の代替物。「トーチ」なの」

化け物を追い払った後、紅蓮の少女は僕に言った。つまり、すでに本当の僕は死んでいる。今ではなく、さっきの化け物に会うより以前に、人間の僕は食われていた。その証拠に、食われた人の体に灯火が見える。その灯火が燃え尽きると、その人は誰にも気付かれる事なく、この世から跡形もなく消えてしまった。

僕は人ではなく、物だ。坂井悠二の代替物であって、人ではない。僕も他の代替物と同じように、いずれ消え去る。そんな事をした化け物を退治するのが、紅蓮の少女の仕事らしい。とても信じられない話だけれど、信じられない話じゃなかった。だって僕は事前に、平井さんに警告されていたのだから。

「平井さんは、知っていた……？」

そうとしか考えられない。でも、不思議な事がある。平井さんの警告は偶然だったのだろうか？　平井さんは化け物の存在を知っていたから、僕に警告してくれたのだろう。「人の多い場所＝学校帰りの商店街」と言ったのも分かる。今日、僕に警告してくれたのは、僕が平井さんの恋人になったからだと思う。

『お前の中には宝が隠されている。世界の真実を知りたければ、自ら向かうのも手だ』

『今は分からなくてもいい。いずれ分かる』

もしも僕が平井さんに話しかけていなければ、平井さんに告白されていなければ、平井さんの告白を受け入れていなければ、平井さんが僕に警告する事はなかったのかも知れない。そう、偶然だ。最初に平井さんに話しかけたのは僕で、そこに僕の意思があった事は間違いない。

『先に言っておくが、これは冗談じゃない。本気（マジ）だ。本気でオレと恋人にならないか？』
『オレと結婚しよう』
　ただ一つ思う事があって、平井さんの告白は突然のものだった。
「どうしてそうなった」と思うほど唐突だった。あの時は僕の意図していない言葉が原因なのかと思ったけれど、そうじゃなかったとしたら？　あの告白の状況が平井さんによって作られたものだとしたら？　そう思った僕は、どうして平井さんが僕に告白したのか尋ねたくなった。
『もちろん、それだけが理由じゃない。お前を好きな気持ちは本当だ。たった今ではなく、ずっと前から、この世界に生まれる前から、お前に好意を抱いていた、これはウソじゃない』
　生まれる前から僕の事を好きだなんて、ありえない。きっと平井さんの過剰表現だ。そう思いたい。けど、分からない。分からなかった。僕は平井さんを信じたい。僕の気持ちが分からなかった……僕は疲れているのだろう。明日は学校で平井さんと会う。その時、僕は如何すればいいのだろうか？

　翌朝、紅蓮の少女が僕を待ち受けていた。僕はトーチだけど、そのトーチの中でも特殊なミステスと聞かされる。ミステスは不思議な力を持つ宝具を内包しているらしい。いずれ僕の灯火が燃え尽きる前に、敵が襲ってくるだろうという話だ。そんな訳で僕は、紅蓮の少女に監視されている。
「ねえ、紅世と関わってる人間っているの？　封絶の中じゃ動けないでしょ？」
「フレイムヘイズや徒（ともがら）の協力があれば可能よ。外界宿（アウトロー）に人間の構成員もいると聞いた事があるわ」
　僕は宿している宝具のおかげで、封絶の中でも動き回れる。でも、普通の宝具を宿したミステスでは動けない。そして封絶の中でも動き回れる宝具は、とても珍しい宝具だ。それと、紅蓮の少女によると外界宿という所は、フレイムヘイズの支援を行っているという。その

組織の中には少ないけれど、人間の構成員もいるらしい。
　平井さんは、その関係者なのだろうか？　でも、そうと決まった訳じゃないから平井さんの事は、紅蓮の少女に話さない。もしも僕の予想と違って、平井さんがフレイムヘイズに目を付けられたら大変だ。怪しい点はあるけれど、まだ僕にとって平井さんは「日常」の側だった。
　教室に入ると、まずはクラスメイトを見回す。その中に僕のように、トーチとなっている人はいなかった。もしかすると平井さんはトーチなのではないかと思っていたけれど、平井さんにも灯火は見えない。僕と同じトーチではない。その事に安心すると同時に、少し寂しくなった。
「坂井悠二、そんなにオレの胸が気になるのか？　お前とオレは、すでに恋人だ。だから遠慮せず、触ってもいいぞ」
「そんな邪（よこしま）な理由じゃないよ!?」
　立ち上がった平井さんの両腕によって、僕は捕獲される。そして僕の顔はジャージに押し付けられた。幸いな事に平井さんの胸は滑らかで、呼吸が出来ないまま窒息するという事はない。でも、ここは教室だ。恥ずかしかった僕は脱出しようと足掻いたものの、平井さんの体はピクリとも動かなかった……平井さんって力持ちなんだ。
「その様子だと、化け物と会ったな？」
　僕にだけ聞こえる声で、平井さんは言った。ドキリと僕の心臓は跳ねる。足掻いていた僕は、その言葉に気を取られて動きを止めた。すると平井さんは僕を解放する。やはり平井さんは「この世の本当のこと」を知っているのだろう。いったい平井さんは何者なのだろうか？
「じゃあ、オレは早退する」
「えぇ、なんで!?」
「お前を狙って、ここに化け物が来るからだ」
　僕は絶句する。非情で冷酷だけれど、平井さんの言葉は正しかった。平井さんはクラスメイトを見捨てるつもりだ。昨日のような事が、教室で起こるかも知れない。僕のせいでクラスメイトもトーチにされるかも知れない。僕は学校になんて行かず、人気のない場所にい

るべきだった。
「平井さんが学校を休む必要なんてないよ。僕が居なくなればいい」
「そうか。では、そうしよう」
　近い内にトーチの僕は消える。これからの生活がある人間の平井さんよりも、僕が学校を休めばいい。それにしても平井さんは、あっさりと納得した。平井さんは僕が消えても構わないのだろうか？恋人になったばかりだけど、その扱いは酷いと思う。まさかトーチが消滅すると、平井さんは知らないのかな？
「これで会うのは最後かも知れないし、言っておくぞ。化け物共の目的は、トーチに仕込んだ爆弾を爆発させて、御崎市を崩壊させる事だ。その起点となるハンドベル型の宝具を破壊すれば発動は止められる。あとは作戦が失敗した化け物に、拳銃型の宝具でフレイムヘイズを攻撃させれば自動的に勝てる。火除けの効果がある指輪型の宝具は、人間に戻るために必要な転生の自在式が仕込まれているから確保しておけ」
「ごめん。ちょっと意味が分からない」
「そうか。こんな事もあろうとメモに纏めておいた」
　そうして平井さんから渡された紙は、とんでもない危険物に見えた。本当に、平井さんは何者なんだろう。僕がトーチと知っていて、平井さんは恋人になったのかな。化け物と会ってから、僕はトーチの灯火が見えるようになった。平井さんには、ずっと前から、僕の灯火が見えていたのかも知れない。
「ただし、フレイムヘイズにオレの事は話すな。絶対に話すなよ。面倒な事になるから。チビジャリの世話は、お前に任せる」
　どうやら平井さんは、フレイムヘイズな紅蓮の少女に会いたくないらしい。チビジャリと呼んでいるあたり、あの赤い少女を嫌っているのかも知れない。あのトーチを物扱いする赤い少女は僕も苦手だけれど、化け物から助けてもらった事に違いはない。その赤い少女を悪く言って欲しくはなかった。
「平井さんは、どうして僕に告白したの？」
「どうして、と言われてもな……秘密だ」

「じゃあ、一つだけ聞かせてくれる？　平井さんはフレイムヘイズの協力者なの？」
「いいやオレは、お前の協力者だ」
「でも僕はトーチで、本当の坂井悠二じゃないよ」
「オレが告白したのは、お前だ。灯火（トーチ）の坂井悠二だ」
　そう言われて戸惑ったけれど、僕は嬉しかった。平井さんは僕がトーチと知った上で、僕に告白してくれたんだ。僕が持っている他人との思い出は、僕のものではなく坂井悠二のものだ。でも僕をトーチと知った上で好きになってくれる人がいて、僕は救われた気がした。たとえ、僕に残された時間が残り少なくても。

【裏】

　炎髪灼眼と坂井悠二が出会ったようだ。近い内に化け物が、学校を襲撃するだろう。なので早退するつもりでいたら、坂井悠二は「自分が出て行く」と言った。なるほど、それは好都合だ。強制するつもりはないものの、当人の坂井悠二が言ったのだから問題はない。なんだか坂井悠二がショボーンとしているけれど、今さら撤回する機会は与えない。
「平井さんは、どうして僕に告白したの？」
「どうして、と言われてもな……秘密だ」
　お前を盾にするためです。坂井悠二ガンバレ超ガンバレ。御崎市の未来は、お前にかかっている。オレの日常を守るためならば、オレも知識の提供は惜しまない。でも、フレイムヘイズにオレの事は話すなよ！　絶対だぞ！　あの脳ミソ筋肉女は何の考えもなしに、怪しいという理由でオレに刃を向ける恐れがある。
「じゃあ、一つだけ聞かせてくれる？　平井さんはフレイムヘイズの協力者なの？」
「いいやオレは、お前の協力者だ」
「でも僕はトーチで、本当の坂井悠二じゃないよ」
「オレが告白したのは、お前だ。灯火（トーチ）の坂井悠二だ」
　とオレはキメ顔で、そう言った。この後に「だって人間の坂井悠二じゃ役に立たないから」という言葉が続くものの、オレの胸の中に仕

舞っておこう。例の宝具を宿していない人間の坂井悠二なんて何の役にも立たない。でも、そんな事を言ったら台無しだ。世の中には知らなければ良かった事もある。

【表】

学校から早退した僕は、人気のない公園にいた。そこで平井さんのメモを、改めて確認する。平井さんのメモによると、人間に戻る方法があるらしい。そっけない所もあるけれど、ちゃんと平井さんは僕の事を考えてくれていた。文面からは分かり難いけれど、転生の自在式が仕込まれているという「火除けの効果がある指輪型の宝具」は化け物が持っているのだろう。

僕は人間に戻れる。そう考えて、期待に胸を膨らませた。でも、そのためには指輪を手に入れなければならない。制限時間は僕の灯火が燃え尽きるまでだ。それは危険を冒してでも手に入れるべき物だった。少なくとも、多少の怪我は覚悟しなければならない。しかし焦って失敗すれば後はない。

化け物共の目的は、トーチに仕込んだ爆弾を爆発させて、御崎市を崩壊させる事らしい。その起点となるハンドベル型の宝具を破壊すれば発動は止められる。あとは作戦が失敗した化け物に、拳銃型の宝具でフレイムヘイズを攻撃させれば自動的に勝てる……と書いてあるけれど、その文章に僕は疑問を覚えた。なぜ拳銃で攻撃されると「自動的に勝てる」のだろう？　なんだか引っ掛け問題のような悪意を感じる。

「……来た！」

火線が地を走る。一度しか見た事はないけれど、見間違えるはずのない光景だった。薄白い炎が世界に舞い散る。人形が宙に浮き、無数のトランプが舞い、紅蓮の少女が刀を振った。難なく人形を捕らえた紅蓮の少女だったけれど、そこへ化け物のボスが現れる。その白いスーツを着た男の指には、指輪があった。

あの指輪とは限らない。でも奪ってみなければ分からない。ならば化け物のボスから指輪を奪えるのかと言うと、限りなく不可能に近かった。僕には、紅蓮の少女と化け物の戦場に立てる力がない。あの

紅蓮の少女が、ボスを倒してくれる事を期待するしかなかった。しかし、化け物のボスは余裕の表情のまま立ち去ってしまう。
僕には時間がない。化け物と紅蓮の少女の決着を待っていれば、それよりも先に僕は消滅する。紅蓮の少女にとって僕は、化け物を誘き寄せるための囮だ。だから宝具を内包したまま消えても構わないのだろう。でも、人間に戻れると分かった今、僕は消滅する事を恐れていた。焦っていた。
「あいつらはトーチに仕込んだ爆弾を爆発させて、御崎市を崩壊させる気なんだろ？　待ってるだけじゃダメなんじゃない？」
「……お前、なにを言ってるの？」
『……まさか、奴の真の狙いは「都喰らい」か？』
僕の言葉を聞いても、紅蓮の少女は疑問に思うだけだった。でも紅蓮の少女と契約している「紅世の王」は何かに気付いたようだ。その「紅世の王」によると、「都喰らい」は周囲一帯を存在の力に変換する自在法らしい。この街に数え切れないほど配置されているトーチが一斉に消えれば「都喰らい」が起こる恐れがあるという。
「……それで、お前は何で、そんな事を知っているのかしら？」
「え？」
紅蓮の少女が僕に刃を向ける。どうやら紅蓮の少女は「都喰らい」に気付いていなかったらしい。そのプライドを僕が傷付けてしまったのは明らかで、紅蓮の少女は納得できる理由を僕に求めていた。僕は平井さんから聞いたけれど、平井さんから「フレイムヘイズにオレの事は話すな」と言われている。ようやく僕は、失言だった事に気付いた。
僕は言い訳を探す。トーチの灯火は鼓動しているけれど、特に変わった事ではないだろう。それが異常ならば、まっさきにフレイムヘイズである紅蓮の少女が気付いているはずだ。でも、いくら考えても、昨日まで紅世の事を知らなかった僕が、化け物の目的に気付いた理由は説明できなかった。
「どうする、アラストール？」
『ふむ、敵と通じている可能性を否定できぬ。この場で斬り捨てるべ

きか……』
「ちょっと待って！」
不穏な言葉を、僕は慌てて遮る。そして平井さんのメモを取り出した。とりあえず誤摩化そう。「平井さんに渡された」と言わなければ時間は稼げる。後で平井さんには謝ろう。そんな言い訳を考えつつ差し出すと、そのメモは紅蓮の少女に奪い取られた。そうしてメモを読み終わった紅蓮の少女は、呆れた声を出す。
「「トーチに仕込んだ爆弾」や「ハンドベル型の宝具」や「火除けの指輪」は兎も角、「拳銃型の宝具でフレイムヘイズを攻撃させれば自動的に勝てる」なんて罠に引っかかる間抜けがいると本気で思ってるの？」
ああ、うん……それは、ちょっと僕も疑問に思ってた。やっぱり、おかしいよね。そう思って、平井さんに対する疑惑が涌き上がる。もしかして平井さん、この紅蓮の少女が嫌いだから、そんな事を書いたのかな？　それにしては冗談が過ぎている。平井さんが何を考えているのか、僕は分からなくなった。
「誰に渡されたの？」
「それは……言えない。言わない約束なんだ」
『昨日から我等は貴様を見張っていた。何者かの接触があったとすれば、自宅か学び舎であろう』
ごめん、平井さん。すぐにバレそう。

狩人フリアグネ（下）

化け物に関する情報を、平井さんは知り過ぎていた。おまけに紅蓮の少女の暗殺疑惑まで浮上している。敵と繋がっている可能性が高いと、紅蓮の少女は考えていた。戦場となっていた公園から学校へ戻り、平井さんを呼び出す。学校へ戻ってきた僕と紅蓮の少女の姿を見ると、「げっ」と平井さんは呟いた。

そして僕達は校舎裏にいる。僕の時と同じように、紅蓮の少女は平井さんに刃を向けた。すると平井さんから、妙な圧力を感じるようになる。気のせいとは言えないほど物理的な圧力を持っていて、僕は立っていられないほど気分が悪くなった。紅蓮の少女も顔を歪めていたけれど、ちゃんと立っている。これは平井さんが……？

「これを書いたのは、お前？」

「ああ、オレだ」

「答えなさい。お前はフリアグネの協力者なの？」

「自分の街を消滅させようとしている奴の、味方な訳がないだろう」

「じゃあ、なぜ「拳銃型の宝具でフレイムヘイズを攻撃させれば自動的に勝てる」なんて書いてあるのかしら？」

「奴の切り札は、トリガーハッピーという名の拳銃型宝具だ。これは契約している王を強制的に覚醒させる。通常のフレイムヘイズは王の覚醒によって器が崩壊するだろう。しかし、今代の「炎髪灼眼の討ち手」ならば、「天壌の劫火アラストール」を収めるに足る器であると判断した」

「どう思う、アラストール？」

『ふむ、貴様は外界宿（アウトロー）の構成員か？』

「違うな。オレは、ただの人間だ」

なんて平井さんは言うけれど、平井さんから感じる圧力が「ただの人間」である事を否定している。その気配のようなものは少しずつ強くなって、僕を苦しめていた。頭の中身を掻き回されるような痛みが、無数に聞こえる悲鳴の幻聴が、虫が肌を這いずるような感覚が僕の意識を侵して行く。

『貴様のような人間がいるものか』
「アラストール、これは斬ってもいいの？」
　イライラしている紅蓮の少女は、平井さんを斬りたいらしい。おそらく、この苦しみから早く解放されたいのだろう。それに異議を唱えたい僕だったけれど、もはや呼吸するだけでも苦しかった。心臓が重く感じる。体の内側から押し潰されそうだ。そんな中、平気な顔で立っている平井さんが元凶である事は、誰が見ても明らかな事だった。
「――止めておけ、死人が出る」
　紅蓮の少女の殺気に応じるように、謎の圧力が高まる。僕はパクパクと口を開閉した。空気を吸えない。呼吸ができない。そうしてパニックに陥った僕は、陸に上げられた魚のようだった。ジタバタと無様に地面を這って、もがき苦しむ。もはや僕には、自分の心臓の鼓動しか聞こえなくなった。
【表】
　私の暗殺を指示した人間を呼び出す。そいつに贄殿遮那（にえとののしゃな）を突き付けると、さっそく本性を露わにした。おぞましい気配が辺りに広がって、近くにいたミステスが倒れ伏す。私は立っていられない程ではないけれど、これに長くさらされていれば戦闘に支障が出る。
「違うな。オレは、ただの人間だ」
　戯れ言だ。これほど、おぞましい気配を放つものが人間であるはずがない。こいつよりも紅世の王と相対している方が、まだ楽だ。何らかの宝具を使って、正体を隠している紅世の王なのかも知れない。そうであれば、この余裕の態度も納得できる。とにかく、早く、斬ってしまおう。そうすれば分かる。
『貴様のような人間がいるものか』
「アラストール、これは斬ってもいいの？」
「――止めておけ、死人が出る」
　私が殺意を向けた瞬間、おぞましい気配が強まった。近くにいたミステスは地面を這いずっている。もはや、これ以上は耐え切れない。

目の前にいる人間は、紅世の徒に相当すると判断して私は封絶を張った。でも、その封絶は人間に触れた瞬間、甲高い音と共に砕け散る。
「封絶を弾いた!?」
　私は相手の攻撃に備える。でも、人間は動かなかった。その場から一歩も動かず、おぞましい気配を周囲に振り撒いている。私は贄殿遮那（にえとののしゃな）で人間を斬り捨てようと試みた。でも、人間に当たる直前で、贄殿遮那（にえとののしゃな）の刀身が消える。虹色の光に纏わり付かれ、刀身が崩れて行く。
「そんな！」
『刀を手放すのだ！』
　贄殿遮那（にえとののしゃな）は力の干渉を受け付けない。そのはずなのに刀身が、虹色の光に食われて行った。やがて柄まで飲み込まれ、この世から贄殿遮那は消滅する。贄殿遮那は私がフレイムヘイズになった日に、私と共に歩む事を決めた宝具だった。それを奪われて、私は激昂する。
「おまえェ――！」
『不用意に近寄るべきではない！』
「落ち着け。オレに危害を加えない限り、そちらを害する気はない」
　ふてぶてしく、遥かな高みから見下すように人間は言う。アラストールの止める声も聞かず、カチンと来た私は怒りに身を任せていた。体の中で煮えたぎる熱い思いを、手の内に収束させる。それは炎の剣となった。アラストールと契約してから、初めて扱えた炎に喜ぶ間もなく、その炎の剣を人間に叩き付ける。
　すると虹色の光が広がった。爆発して、辺り一面に広がる。私が後方へ跳ぶと、虹色の光が追ってきた。あの性質の悪い虹色を見ていると、同じ色の炎を持っていた「シロ」を思い出して不快な気持ちになる。虹色の光は校舎に触れると、贄殿遮那と同じように消し去った。封絶の展開は妨害されているから、このままでは大騒ぎになってしまう。
「ムカつく、ムカつく、ムカつく！」
『虎の尾を踏んでしまったようだな』

でも、しばらく逃げ回っていると虹色の光は治まった。だから戻ってみると、人間がミステスの側にいる。地面に膝をついて、気絶しているミステスを抱きかかえていた。その様子は無防備で、今この瞬間を狙えば人間を倒せるように見える。でも、アラストールに止められた。

『あの人間は、今は捨て置いた方が良いだろう。人間との戦いで消耗すれば、紅世の王であるフリアグネとの戦いに支障が出る』

「そう……アラストールが、そう言うのなら」

人間に気付かれない内に、私は立ち去る。虹色の光に抉られた校舎の一部が、大きな音を立てて崩れ落ちた。その衝撃で地震のように大地が揺れる。慌てて校舎から飛び出す人間達が見えた。その様を見て私は思う。あの人間は他の人間達とは違う。私が今まで出会った事がない、不可解な生き物だった。

【裏】

バレるの速過ぎィ！　坂井悠二にはガッカリだよ！　おかしい。オレの記憶通りの坂井悠二ならば、達者な口でチビジャリを丸め込めるはずだ。坂井悠二の主人公補正は、どこにいった？　そしてチビジャリはオレの危ぶんでいた通りに、でかい刀をオレに突き付ける。

おい、やめろ、どうなっても知らんぞー！　刃物を向けられるなんて、生まれてから初めての経験だ。包丁で指を切った事はあったけれど、その時は包丁が消滅した。自動迎撃機能の一部が反撃を始め、チビジャリの向ける敵意を押し返すように威圧する。すると近くにいた坂井悠二が巻き沿えになってダウンした。あー、ごめん。

『貴様のような人間がいるものか』

「アラストール、これは斬ってもいいの？」

「――止めておけ、死人が出る」

物騒な発言を、オレは慌てて遮る。無表情だから分からないと思うけど、これでも焦ってるんだ。チビジャリの殺気に反応した迎撃機能が、反撃として殺気を返す。すると。坂井悠二が口から泡を吹きながらビクンビクンと跳ね始めた。なんだか死にそうだけど大丈夫か？

「封絶！」

チビジャリが封絶を張る。結界のようなものだ。「リリカルなのは」的に言うと封時結界な。火線が地面を走り、そして、オレに触れると「パリィン」という音ともに砕け散った。それに一番驚いたのはオレだろう。まさか封絶を弾くとは思わなかった。自動迎撃機能さんは、もっと休んでもいいのよ。

それで止めれば良いのに、チビジャリは刀を振り回しながらオレに迫ってくる。すると、その刀はオレを包む虹色の光に飲み込まれて消滅した。あの刀ってＲＰＧで例えるなら「売買できない貴重品に相当するシナリオ的にも重要な武器」だったと思うけど……オレは「止めておけ」って事前に警告したからな！

「おまえェー！」

『不用意に近寄るべきではない！』

「落ち着け。オレに危害を加えない限り、そちらを害する気はない」

紅世の王の忠告も聞かず、チビジャリは飛びかかってくる。主人公終了のお知らせーと思ったけれど、なんとチビジャリは炎の剣を作り出した。たしかチビジャリは「天壌の劫火アラストールのフレイムヘイズ」であるにも関わらず、炎を扱えなかったはずだ。贄殿遮那を失った事が、そんなにショックだったのか。

その炎の剣をチビジャリは、オレに叩き付ける。しかし、虹色の光を突破するには至らなかった。反撃として虹色の光が溢れる。辺り一面に広がって、校舎を抉り削った。近くの教室に人が居なかったのは不幸中の幸いだろう……それは兎も角、あのチビジャリ、坂井悠二を見捨てやがったー！

坂井悠二は地面に倒れたままだ。運の良い事に、虹色の光に飲み込まれてはいない。光と光の間に、上手い具合に転がっていた……いや、虹色の光が避けているのか？　その光景を不思議に思ったけれど、とにかく一秒でも早く止まるように脳内で命じる。これで制御できるとは思っていないけれど。

しかし、オレの予想に反して虹色の光は引く。ずるずるとオレの中に戻っていた。それで分かったけれど、これは触手だ。光の集まりに見えたけど、ちゃんと形はあったらしい。オレは気絶している坂井悠

二に近寄り、その身を抱き起こす。重い頭が「くてん」となったので、手で支えてやった。無駄に可愛くて困る。
やれやれ面倒な事になった。封絶が張れていなかったため校舎は直せない。壊れた校舎に気付いた人々が、こちらに駆け寄ってくる。チビジャリは逃げやがった。でも、ここは逃げるよりも、被害者を装った方が良いだろう。脆くなった校舎が崩れ落ちて、オレと坂井悠二は間一髪助かった訳だ。えっ、その崩れ落ちたはずの瓦礫は何処にあるのかって？　知らんがな。
【表】
「僕は授業を無断欠席し、校舎裏で平井さんとイチャイチャしていた」という事になっているらしい。校舎の一部が消失して大騒ぎになっている横で、僕と平井さんは教師の説教を受けていた。でも、すぐに教師が不調を訴え、説教は中断される。それが何度も続いたおかげで、僕と平井さんは早目に解放された。
「燃える単眼が宙に浮き、世界は終焉を迎える！　見よ！　空が、空が縮む！　おお、潰される！　融けてしまう！　いやだ、熱い熱い！　冷たくて熱い！」
「近藤先生が病気ー！」
「平井さん、なにかした？」
「さーな」
その翌日、また紅蓮の少女が僕を待ち伏せしていた。平井さんの言った「都喰らい」の可能性が高いので、トーチを潰して回るらしい。「平井さんは信用に値しないけれど、都喰らいに関しては一理ある」と紅世の王は言っていた。「それなら平井さん自身も信用してくれないかな」と思ったけれど、昨日の有り様を見る限り無理だろう。
そうしてトーチを潰し歩いていると、化け物のボスが現れる。狩人フリアグネだ。そいつは僕を誘拐して、紅蓮の少女を誘き寄せる。平井さんが言っていた通り、「火除けの効果がある指輪」をフリアグネは装着しているらしくて、紅蓮の少女が扱う炎の剣は効かない。つまり、転生の自在式が仕込まれているのは、あの指輪で確定した。なんとしてもフリアグネを倒して、あの指輪を手に入れなければならな

い。僕が消滅する前に。
「後ろ！　蹴りだ！」
　フリアグネは手下を爆破する「ハンドベル」で、紅蓮の少女を攻撃していた。その爆破の鼓動を、紅蓮の少女は感じ取れないらしい。そこで僕は鼓動の位置を、紅蓮の少女に教える。状況が大きく変わったのは、フリアグネの側にいた人形が自爆してからだろう。ボロボロになりながらも紅蓮の少女はフリアグネに跳び付き、「ハンドベル」を持っていた左腕を捻り取った。そうしてコロコロと転がってきた指輪を僕はキャッチする。一方、「ハンドベル」は紅蓮の少女によって踏み潰されていた。
「壊れてしまえ!!　全て！　全て!!　全てェェェー!!」
　僕から存在の力を奪い、フリアグネが拳銃を紅蓮の少女に向ける。撃たれた紅蓮の少女は、ビルの屋上から落ちて行った。しかし、ビルの向こうから紅蓮の巨人が顔を出す。その吐息にフリアグネは飲まれ、灰塵と化した。こうして戦いは終わる。でも、フリアグネに存在の力を奪われたせいで、すでに僕の体は透けていた。
「早く、転生の自在式を……どうすれば起動できる……!?」
『無駄だ。フリアグネが都喰らいを図っていたように、転生の自在式を起動するためには、途方もない存在の力が必要になる』
　紅蓮の巨人アラストールの死刑宣告は、僕を絶望に叩き落とした。もはや時間がない。これから存在の力を集めるには時間が足りない。そもそも、どうやって存在の力を集めるというのか。討滅された狩人フリアグネのように、都喰らいを起こすしかない。そんな事は出来なかった。
　平井さんは、どうするつもりだったのだろう？　最後と思って考えたのは、家族の事でも、紅蓮の少女の事でもなく、平井さんの事だった。平井さんから告白を受けたのは、たったの2日前だ。この3日間の間に、いろんな事があった。最後に一目で良いから、平井さんに会いたかった。
「……あれ？」
　でも、0時を越えると共に、透けていた僕の体は元に戻った。トー

チであるのは変わらないけれど、今すぐ消滅する心配はない。紅蓮の少女によると、僕の中にある宝具は「零時迷子」という物らしい。一日の間に失った存在の力を回復する宝具だ。おかげで僕は、日常に戻る事ができた。

『これで会うのは最後かも知れないし、言っておくぞ。化け物共の目的は、トーチに仕込んだ爆弾を爆発させて、御崎市を崩壊させる事だ。その起点となるハンドベル型の宝具を破壊すれば発動は止められる。あとは作戦が失敗した化け物に、拳銃型の宝具でフレイムヘイズを攻撃させれば自動的に勝てる。火除けの効果がある指輪型の宝具は、人間に戻るための転生の自在式が仕込まれているから確保しておけ』

結局、平井さんの言う通りになった。そのことに紅蓮の少女は不満そうだ。少なくともウソは言ってなかったとして、平井さんの処分は保留にするらしい。たぶん紅蓮の少女が、平井さんに関わりたくないだけなんじゃないかな。また平井さんに刃を向けて、生きて帰れるとは思えない。そこで僕は、ふと気付いた。

「転生の自在式が仕込まれているから確保しておけ」とは書いてあったけど

「転生の自在式で人間に戻れる」とは書かれてなかったなぁ……。

屍拾いラミー

ちょっと平井さんが席を外している間に、僕は吉田さんとデートする事になっていた。「僕は平井さんの恋人だから」と断ったものの、女子生徒陣に詰め寄られて押し切られる。話の中心である吉田さんはオロオロしていたので被害者なのだろう。でも、他の女の子とデートするなんて言ったら、平井さんは何て言うのかな？　怒るのかな？　それとも――、

「ねえ、平井さん。じつは吉田さんと美術館へ行く事になったんだけど……」

「そうか。いいんじゃないか？　タイミングが良ければ、美術館には屍拾いラミーがいる。いろいろと話を聞いてみるといい」

「屍拾いラミー？」

「紅世の徒だ。ラミーという名は偽名で、真名は「螺旋の風琴リャナンシー」。存在の力は徒並み……つまり、紅世の王と呼ばれるほどの力はない。だが、最高の自在師だ。封絶を開発したのも、その「火除けの指輪」の裏側に刻まれている転生の自在式を開発したのも、螺旋の風琴リャナンシーもとい屍拾いラミーだ」

転生の自在式を開発した人物と聞いて、僕は驚く。封絶というのは、外部から因果を切り離す結界だ。それの開発者ということは凄い人なのだろう。その紅世の徒に聞けば「都喰らい」を起こさずとも、転生の自在式を起動する方法が見つかるかも知れない。でも、平井さんに聞いた方が早い気もするなぁ……。

「平井さん、転生の自在式を起動する方法ってあるのかな？」

「そうだな……ラミーが存在の力を蓄積する方法を知っている。それを使って力を溜めれば、いつか自在式を起動できるだろう。もっとも、何十年かかるか分かったものではない。まあ、そんな事をしなくても、いずれ膨大な存在の力を手に入れる機会はある」

「その機会って？」

「……むう、いや待てよ。そう考えてみるとラミーの方法は堅実か？」

平井さんは「むむむ」と唸った。よく分からないけれど、「その時」

が確実に来るとは言えないらしい。ならば平井さんの言うラミーさんから、存在の力を蓄積する方法を聞いておけば安心だ。でも、初めて会った徒は化け物だったから、紅世の徒と言われると人食いのイメージが強い。

「そんなに不安なら炎髪灼眼に「屍拾いラミーと会うから付いて来て欲しい」と言え」

「平井さんは付いて来てくれないの？」

「あいつはフレイムヘイズ。オレは、ただの人間だ」

それは無い。ただの人間であるはずがない。紅蓮の少女の愛刀を消滅させた話は聞いている。よほど大切な刀だったらしくて、紅蓮の少女は怒り狂っていた。紅蓮の少女よりも、平井さんに付いて来てもらった方が安心できる。でも平井さんは、フレイムヘイズや紅世の徒に関わりたくないらしい。

そういう訳で僕は、吉田さんと一緒に美術館を訪れていた。出発する前に声をかけたから、紅蓮の少女も近くに居ると思う。僕と吉田さんは館内を見て回る。すると、一つのトーチが消失した。その近くには老紳士がいる。その老紳士が、存在の力を奪ってトーチを消したんだ。

その光景に寒気を覚える。もしかすると話しかけた瞬間、僕は食われるかも知れない。でも、屍拾いラミーが危険な徒ならば、「いろいろと話を聞いてみるといい」なんて平井さんは言わないだろう。それに近くに紅蓮の少女もいるはずだ。そう考えていると僕が動くよりも先に、紅蓮の少女が徒と接触した。

『まさか本当に居るとは……久しいな、屍拾い』

「天壌の劫火か。無用な戦いは避けられそうだ」

「アラストール、知り合い？」

アラストールと徒は知り合いらしい。でも、アラストールの契約者である紅蓮の少女は、その徒を知らないようだ。少なくとも戦闘になる様子はない。それを見て、僕は安心できた。「転生の自在式」について聞きたい僕は、徒の下へ向かう。僕の後ろから、一般人の吉田さんも付いて来ていた。

美術館の最上階にある喫茶店へ移動する。そこで徒が、吉田さんを眠らせたため僕は警戒する。でも、一般人である吉田さんに、紅世に関わる話を聞かせたくなかったらしい。それは僕も同じ気持ちだったので納得した。僕は持ち歩いていた「火除けの指輪アズュール」を取り出して、徒に見せる。

「僕はトーチから人間に戻りたいんです。この指輪の裏側に刻まれている「転生の自在式」を開発したのは「屍拾いラミーさん」であるという話を聞いて会いに来ました。でも起動するには存在の力が足りなくて……ラミーさんが知っているという、存在の力を蓄積する方法を教えていただけませんか？」

「ふむ……つまり君達は偶然ではなく、ここに私が居ると知ったから会いに来たのかね？」

「はい」

「これでも身を隠していたのだがね。こうもアッサリと探り当てられると自信を失うよ。いったい誰から、ここに私が居ると聞いたのかな？」

「えーと……」

『我がフレイムヘイズも、そのトーチから「美術館に屍拾いラミーが居るかも知れない」と聞いて、ここを訪れたのだ』

あれ？　転生の自在式について聞いたのに、逆に質問されてる？　なんでアラストールまで徒に加勢してるのかな？　……うん、分かってる。屍拾いラミーさんの居場所を知っていた事に疑問を抱いてるんだ。でも、たぶん平井さんの事は言わない方がいいんだろうなぁ……。

「僕は、僕の友人から聞きました」

「ほう、友人か。それは人間の？」

「はい、人間です」

『まったく存在の力や自在法の気配を感じさせず、封絶を弾き、この世から贄殿遮那（にえとののしゃな）を消滅させた人間を、人間と呼べるのならばな』

余計な事は言わないで欲しいんだけど。贄殿遮那という大切な刀

を消滅させられた事を、アラストールは根に持っているらしい。「紅蓮の少女に瑕(きず)を付けられた」と思っているのかも知れない。これじゃ屍拾いラミーさんに、平井さんが怪しまれるじゃないか。
「話が脱線してしまったな。話を戻すが、存在の力を蓄積する方法だったか。あれを未熟な者に伝授しても、制御できずに自爆するだろう。ましてや、存在の力すら扱えない君に、教える事はできない」
「そうですか……」
　やっぱり平井さんの言った「膨大な存在の力を手に入れる機会」に賭けるしかないのかな。いいや、そもそも存在の力を扱えない僕では「転生の自在式」を起動できない恐れがある。できれば自分の力で、存在の力を扱えるようになりたい。でも、それを教えてくれる人がいなかった。
「僕が存在の力を扱えるようになるためには、どうすれば良いんですか？」
「先天的な才能があれば話は簡単だ。そういう者達は、紅世の王と契約してフレイムヘイズとなる」
「ダンスパーティーという宝具で埋め込まれた鼓動を、感じ取った事はありますけど……」
「私に教授を求めるのかね？　残念ながら私には目的がある。そんな余裕はない。それに君には都合のいい相手がいるじゃないか」
『この子には重大な使命がある』
「私は遊びでやってる訳じゃないの」
「僕だって、遊びでやってる訳じゃない！　僕は人間に戻りたいんだ！」
　気が付けば叫んでいた。喫茶店に僕の声が響き渡る。封絶を張っている訳じゃないから、他の客の視線を集める事になった。ハッと気付いた僕は押し黙る。僕は無力だった。自分の力では何も出来ない。せっかく平井さんが与えてくれたチャンスを掴めなかった。そんな僕の耳に、「危ういな」と呟いた徒の声が残った。
『本日午後5時頃、御崎市の○○区が塩に覆われ、住民数百名が行方不

明になっています。警察や消防による救出作業が行われているものの、大量の塩が障害となり、作業は難航しています』

翌日、昨日の事件が原因で休校になった。紅蓮の少女も何処かへ出かけている。そこで、また僕は美術館を訪れていた。館内をフラフラと歩き回っていた僕は、屍拾いラミーさんと再会する。まるで偶然出会ったような言い方だけれど、僕がラミーさんを探していたのは明らかな事だ。そこで僕はラミーさんに誘われ、再び最上階の喫茶店へ入る。

「私は名乗った。今度は君の名を聞かせてもらいたいな。ミステスの少年」

「……僕は坂井悠二です」

「指輪を見てあげよう。十分な存在の力さえあれば、とある条件を満たすだけで発動できるように調整できる」

「えっ、本当ですか？　でも、急に何で……？」

「「彼女」は封絶を弾くという話を思い出してね。おかげで厄介な相手に見つからずに済んでいる。その礼だ」

「彼女？　平井さんの事ですか？」

「ほう、彼女の名は平井というのか」

しまった、と僕は思った。彼女と言われて、うっかり平井さんの名前を出してしまった。まさか屍拾いラミーさんは、平井さんに興味を持っているのだろうか？　命を落とすかも知れないから止めた方が良いと思う。それにしても、平井さんが封絶を弾く話が、なにか関係あるのかな？

「心配せずとも……炎髪灼眼をあしらう人間に、わざわざ突っ込もうという気は起きないよ」

「そうでしょうね。安心しました」

「よし、出来たぞ」

「こんなに早く!?」

改良された指輪を受け取る。

「ありがとうございます。さすが最高の自在師ですね」

そう言った僕の頭は、ガシリと掴まれた。
「妙だな……私を知る者は、そんなに多くは「生きていない」はずなのだが……！」
屍拾いラミーさんが不穏な言葉を口走る。もしかして言ってはいけない言葉だったのだろうか。そういえば「屍拾いラミー」という名は偽名で、真名は「螺旋の風琴リャナンシー」と平井さんから聞いている。屍拾いラミーさんは正体を隠している？　そういう事は、ちゃんと教えて欲しかった。
「冗談だ。だが、私がソレである事は、あまり言い触らさないでくれよ」

心臓に悪いから止めてください。

【表】
遠くから広がってきた何かが、オレの体に触れると弾かれる。弾けて、消えた。これは封絶じゃないな。時期的に考えると、探知の自在法か。おそらく「蹂躙の爪牙マルコシアスのフレイムヘイズ」だろう。とは言ってもオレには関係ない。オレに出来る事は、探知の邪魔にならないように町の外れへ向かう事だ。
しかし探知の間隔は、だんだん短くなる。おかしいな。オレは探知から逃れるように動いているはずだ。探知の間隔が長くならないと、おかしい。まさか探知の自在法を弾く、オレを追って来ている？　まあ屍拾いラミーとオレを混同している場合でも、一目見れば誤解と分かるはずだ。だってオレはフレイムヘイズでも、トーチでもないもの。そう思ってテクテクと歩いていると、青いスーツを着た女がオレの前に降り立った。
「邪魔をしてたのはあんたねオロロロロロ」
『うわっ、きったねぇ！』
いきなり目の前で、胃の中身を吐き出さないでほしい。ちなみに『うわっ、きったねぇ！』と言ったのはオレではなく、「蹂躙の爪牙マルコシアス」だ。それで「蹂躙の爪牙マルコシアスのフレイムヘイズ」

もとい「弔詞の詠み手」が、何で酔っているのかと言うと……「弔詞の詠み手」は酒飲みだったな。
「お酒の飲み過ぎじゃないか？」
「言ってくれるじゃない……あんた何者？」
「ただの人間だ」
「へー、ただの人間ねぇ」
　そう言うと「弔詞の詠み手」は、オレに向かって炎弾を放った。オレが「あっ」と言う間に着弾したものの、当然のようにオレは無傷だ……やらかしやがった。急に現れたと思ったら、さっそくやらかしやがった。自動迎撃機能がワッショイワッショイを始める。みなぎってきたー。
「へえ、やるじゃない」
『だが、フレイムヘイズでも徒（ともがら）でもねぇ……』
「――先に言っておこう、オレは無実だ」
　オレの体から閃光が走る。次の瞬間、その光を浴びた物が崩れ落ちる。ボロボロになって崩れ去っていく。その正体は塩だ、すべてが塩になった。道路も家屋も大地も空に浮かぶ雲も、あらゆる物が純白に染まる。それは、形あるもの全てを塩に変える死の光だった。
　目の前にいたフレイムヘイズも塩の固まりと化している。いつの間にやら獣の形をした炎を身に纏っているけれど、無駄だったようだ。「蹂躙の爪牙マルコシアス」の着グルミもとい兵装ごと全身が塩と化している。それが崩れて塩粒になると、群青色の炎が散った。これは死んだな。
　そう思っていると、群青色の炎が噴き上がった。そうして巨大な獣を形作る。「蹂躙の爪牙マルコシアス」の顕現だ。契約者が死んだから、最後に一暴れするつもりなのか。しかし再び閃光が走ると、巨大な彫像となっていた。塩で出来た彫像は自重を支え切れず、ドサドサと崩れ落ちる。なんて、あっけない。風情がない。
　辺りはシーンと静まり返っていた。そりゃそうだ。さっきまでコンクリート製の建物が建ち並んでいたのに、今は辺り一面塩の平原と化している。誰もいない、誰も生き残っていない。遠くから見ると一

見、雪が積もっているように見えるだろう。まさか塩が積もっているなんて誰も思わない。
幸いだったのは、学校からもオレの自宅からも距離のある場所で起こった事だ。「弔詞の詠み手」の探知を避けるために、町の外れへ向かっていたからな。坂井悠二は吉田一美と共に、美術館へ行っている。炎髪灼眼も坂井悠二が連れて行っているはずだ。屍拾いラミーも美術館にいるはず……上手い具合に一カ所に固まってるな。
それにしても勝手に敵意を向けて、勝手に攻撃して、勝手に死んだ。そんなに探知の邪魔だったのか……なんて事を考えながら、オレは塩の平原を走る。辺りは真っ白なので目立つ、絶対目立ってる。おまけにオレは、いつものようにジャージだ。不審者の身元特定も余裕だろう。とりあえず全部フレイムヘイズのせいにしよう。そうしよう。
【裏】
屍拾いラミーを追って私は、この街にやってきた。探知の自在法を使って、ラミーを探す。でも、探知の自在法は何かに弾かれて消えた。その方角から何か迫ってくる。もちろん警戒はしていた。それでも私の張った防御の自在法を素通りして、それは私に直撃する。
「いったい何がオロロロロロ」
『うわっ、きったねぇ！』
急に胃の中身が逆流した。マルコシアスが非難の声を上げる。仕方ないでしょ！　気持ち悪いんだから。自在法は何かに弾かれて消えたけれど、私の探知に対して反撃されたのは明らかだ。だから吐き気が治まると私は、自在法が弾かれた方角へ向かう。本型の神器に乗って飛んだ。
『しっかし、悪戯なんだか、よく分からん反撃だな。ウハハ！』
「犯人を見つけたら、とっちめてやるわ！」
『で、我が執拗なる狩人マージョリー・ドー。その犯人はあっちか？こっちか？』
「探知の自在法を弾かれてるから、よく分からないのよ。仕方ないわね。もう一回探知の自在法を……」
「あっちねオロロロロロ」

『うわっ、きったねぇ！』
　どうやら探知を撹乱（かくらん）されているらしい。右へ行ったり左へ行ったりと、余計に時間がかかる。その度に探知の自在法を使って、私の機嫌は急降下する……もう、あったまきた！　この犯人に会ったら紅世の徒だろうと、そうじゃなかろうと殺す！　邪魔する奴は殺す！　そして私は、そいつを見つけた。
「お酒の飲み過ぎじゃないか？」
「言ってくれるじゃない……あんた何者？」
「ただの人間だ」
「へー、ただの人間ねぇ」
　そいつは人間だった。フレイムヘイズでも紅世の徒でもない。それなのに私を、ここまで「おちょくる」なんて、やってくれるじゃない。とりあえず様子を見るために炎弾を放つものの、人間の表情は変わらない。そのまま指一本すら動かす事なく、炎弾は掻き消された。
「へえ、やるじゃない」
『だが、フレイムヘイズでも徒（ともがら）でもねぇ……』
「――先に言っておこう、オレは無実だ」
　光が走る。白過ぎる光が――迫り来る不吉を直感した私は、その場に炎の衣「トーガ」を残して地面に潜った。砕けた道路の欠片が肌を派手に削ったけれど、そんな事を気にしている余裕はない。地上に残した炎の衣が、塩に変わっていると分かった。おそらく辺り一面が塩と化しているのだろう。存在の力を感じ取る限り、もはや地上には「何も残っていない」と分かった。
　バカげている。とんだ化け物だ。この私が、戦闘狂と呼ばれる私が、逃げ隠れる事しかできない。子供のように震えて、穴の中に隠れる事しかできない。さっきまでの怒りは消え去って、早く化け物が立ち去ってくれる事を私は願っていた。早く！　早く！　早く！　早く！
『それで良いのか？　我が愛しのマージョリー・ドー。
　ネズミみてぇに巣穴に潜り込んで満足か？
　怯えて震えて命乞いをして、それで命を繋いで、お前の心は満たさ

れるのか？」
「満足な――満足な訳がない。
からっぽなのだから。
せめて、あいつだけでもいい。
あいつだけでも……」
『言ってみな、その先を。
おまえは空っぽの器。
群青の映える綺麗な器だ』
『俺を呼べ！
ぶち殺しの雄叫びをあげて、俺を呼べ！』
『俺はおまえの器を満たし、おまえは俺の求めを満たす。
そうだ！　呼べ！
我が麗しのゴブレット！』
群青色の衣を身に纏い、私は再び大地に立つ。安全な寝床から飛び出して「蹂躙の爪牙マルコシアス」の顕現を……憎いあん畜生を打っ飛ばすために、私は再び戦場に立った。そんな私を「人間」が見上げる。不気味で不可解で、おぞましく汚らわしい、そんな「ただの人間」から
――閃光が走った
「バカマルコ、あんだけ格好付けておいて一撃だったじゃない」
『生きてるだろ？　死ななかっただけでも健闘賞だ』
ハラハラと塩が散る。私の体から零れ落ちる。まるで癌（がん）のように広がって、全身を塩と化していく。立ち上がる事すらできず、私は塩の平原に寝転んでいた。ハラハラと雪が降る。塩で出来た雪だ。空で塩になった雲が、塩の平原に降り注いでいる。しょっぱかった。
「ぎっこん、ばったん、マージョリー・ドー。ベットを売って、わらに寝た……」
静かだった。生き物の声が聞こえない。なにもかも死に尽くされていた。不気味なほど白くて白すぎる、死の世界。まるで世界の終わ

りのように。その純白で世界は染め上げられて、汚れている物は生き残れない。塩を吸った喉が痛み、私はケホケホと咳をする。皮が塩に変わって血が流れ出た。純白に赤い色が混じる。
『蹂躙の爪牙マルコシアス。それに弔詞の詠み手マージョリー・ドー。ここで何があった？』
『犬だと思って、ちょっかいかけたら、どでかい狼だったってなぁ。うはは、久しぶりだな。天壌の劫火』
　この街にいたフレイムヘイズが来たらしい。バカみたいにトーチが増えるまで、放って置いた役立たずだ。「あんなもの」が居るのに放って置いたのだから、今代の炎髪灼眼は、よっぽどの間抜けなのだろう。まあ、仕方ない。こんな奴でもフレイムヘイズだ。不本意だけれど、他に伝言を頼める奴がいない。
「ジャージの女に……」

　そこまで言って私は、純白の塩になった。本当に、最後まで締まらない女。

愛染の兄妹

お兄様の探し物を見つけるために、私達は海を渡りました。どうやら、お兄様の求める物の「匂い」は、トーチでもフレイムヘイズでもなく、人間から漂っているようですわ。　贄殿遮那（にえとののしゃな）と言えば、今代の炎髪灼眼の代名詞と聞き及んでいたのですが……おかしいですわね？

「たしかに妙だな……罠かも知れん」

護衛の方も、そうおっしゃいます。なので念のために万全の準備を整えました。　私達は自在法「揺りかごの園」の中では無敵なのです。設置に時間が掛かるのが、たまに瑕（きず）ですけれど。とは言うものの、まったく邪魔が入る事なく順調に準備は終わり、私は「揺りかごの園」を広げました。

しかし人間に触れた瞬間、パリィンと今まで聞いた事のない異音が聞こえます。私の「揺りかごの園」が弾かれ、崩壊しました。「揺りかごの園」によって隠されていた紅世の徒としての気配が、止める間もなく広がってしまいます。そして標的だった「ただの人間」の視線が、露わになった私達を捉えました。

「ちぃ！　やはり罠か！」

「撤退しますわ！」

「にえとののしゃな、欲しい」

「お待ちください！　お兄様！」

「吸血鬼」という大剣型の宝具を掲げて、お兄様は人間の下へ向かいます。お兄様に向かって伸ばした手は宙を掻きました。私は慌てて、お兄様の後を追います。しかし、お兄様は人間の前で、潰れたトマトのようになりました。グチャグチャに潰されて、まるでミートボールのようです。

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁ!!　おにぃさま!!」

瞬く間に肉塊と化したお兄様に、私は力を分け与えます。しかし、元に戻りません。存在の力を注いでも注いでも、底の抜けたバケツのように漏れてしまいます。やがて山吹色の炎を散らしながら、お兄様

は燃え尽きてしまったのです。私もお兄様に存在の力を注ぎ過ぎて姿を保てません。
「吸血鬼か、いいものを手に入れた。あとで坂井悠二にプレゼントしよう」
　まるで私の姿が見えていないかのように人間は言います。許せない。よくも私のお兄様を……殺してやる、殺してやる！　殺してやる!!　そう思った瞬間、人間から飛んで来た力によって私はバラバラになりました。わずかに残った存在の力を保てず、私の意識は霧散します。お兄様のかたきを……
【裏】
　愛染の兄妹の登場時間は、わずか３０秒だった。　贄殿遮那（にえとののしゃな）の気配らしき物を追って来た結果、炎髪灼眼ではなくオレに来たのか。あの刀を消滅させたのは光の触手だから、どうなったのかなんてオレは知らない。もしかして贄殿遮那は、まだオレの中にあるのか？
　それは兎も角、残った徒は紅世の王「千変シュドナイ」だ。愛染の兄弟の護衛だったけれど、何の役にも立っていない。おまけにオレを警戒して近寄ってこない。さっさと帰れば良いのに、帰ろうともしない……何しに来たんだ、お前は。カ・エ・レ！　カ・エ・レ！　時間の無駄なので、オレは千変を無視して行く事にした。
「人間以外の何者にも見えないが、貴様……もしや天目一個か？」
「違うから、さっさと帰れ」
　「天目一個」というのは、紅世の徒やフレイムヘイズを殺し回ったミステスだ。分かりやすく言うと、ハイパー化した坂井悠二のようなもの。その正体は贄殿遮那（にえとののしゃな）と思っていい。刀の贄殿遮那が自力で動き回る時の姿が「天目一個」だ。とは言っても「天目一個」＝「贄殿遮那」という事実は知られていない。
「この借りは、いずれ返させてもらおう」
　オレの頭の中で、ブチッと音がした。オレは何もしていない。愛染の兄妹が自動迎撃機能に引っかかって自滅しただけだ。オレを攻撃しなければ、こんな事にはならなかった。それを、まるでオレの責任

のように千変は言う。オレの責任ではない。オレに襲いかかった、お前等の責任だ。
「オレが殺した訳じゃない。お前等が勝手に死んだだけだ」
思わず、言った。自動迎撃機能ではなく、自分の意思で殺意を放った。感情が漏れ出した。すると、ガクンと世界がズレる。辺りを見回しても、世界に目立った異常はない。ビルが倒壊した訳ではなく、車が横方向に吹っ飛んだ訳でもない。ズレたのは世界だ。紅世と呼ばれる世界と、この世界の繋がりが断ち切られた。こんなにも、あっさりと。

【表】
『坂井悠二。明日、そちらの家に行ってもいいか？　いい物を拾った』
なんて電話があった翌日、平井さんは大きな剣を持ってやってきた。吸血鬼（ブルートザオガー）という宝具で、存在の力を込めると赤い波紋が現れるという。つまり存在の力を扱えているか否かが見て取れる。いまだ存在の力を扱えない僕にとって、とても助かる物だった。
「でも平井さん、これ凄く重いんだけど……」
「だからオレが持って来てやったんだ。存在の力を扱えるようになれば波紋が浮かんで持ち上がるから、それまで庭の隅にでも置いておけ」
「平井さんって存在の力を使えるの？」
「ぜんぜん。そこは自分で何とかしてくれ」
「だよね……」
こんなに重い物を素の力で、軽々と持ってきた平井さんにビックリだよ。平井さんが持ってた方が、この剣は役に立つんじゃないかな……いやいや、僕が存在の力を扱えるようになるために持って来てくれたんじゃないか。頑張らないと。そう思っていると平井さんは、キョロキョロと辺りを見回し始めた、
「あの子なら出かけてるよ。昨日の夕方に、すごく大きな地震があって。ニュースじゃ何も言ってなかったけど……」

「昨日、紅世との繋がりが切れたんだよ」
紅世？　紅世と言うと、紅蓮の少女と契約しているアラストールの故郷だ。こっちの世界で人を食ったりしている、紅世の徒の故郷でもある。その紅世との繋がりが切れた？　それって大事なんじゃないかな。だって繋がりが切れたら、故郷に帰れなくなるじゃないか。
「ええっ!?」
「存在の力を感じ取れる連中は、地震のように感じたんだろ」
「あれ？　でも平井さんって、存在の力を感じ取れないよね」
「まーな」
「それなのに地震の事を知ってるって事は……？」
「そこに辿りつくとは天才か」
「いったい何したの、平井さん!?」
「ムシャクシャしてやった。今は反省している」
まったく反省の色が見えない。
「まあ、目印となるベルペオルの右目があるから、蛇さんの帰還に問題はないんだがな。せいぜい新たな徒が来れなくなった程度の話だ。フレイムヘイズは喜ぶんじゃないか？」
僕を見ながら平井さんは言う。ベルペオルって誰だろう。誰かが、何処からか帰ってくる？　平井さんの言葉には謎が多い。そんな事を考えていると、平井さんは帰ろうとしていた。そんな平井さんを僕は慌てて呼び止める。もう用が終わったと思っている平井さんは不思議そうな顔をしていた。
「平井さん、今度ミサゴ祭りへ一緒に行かない？」
「行かない」
即答だった。僕の心は圧し折られそうになる。あれ？　僕って、平井さんの恋人じゃないの？　もしかすると平井さんは祭りとか、そういう騒がしい場所へ行かない人なのかも知れない。でも、悩む様子もなく即答って如何なんだろう？　僕と一緒に行きたくないだけなんじゃないかな？
「ミサゴ祭りの日は「教授」が来るからな。オレは避難する」
「教授？」

「紅世の王「探耽求究ダンタリオン」だ。災害みたいな奴だよ」
「えっ、それって大変じゃないの？」
「放って置けば御崎市が消滅するな」
「そんなに!?」
「まあ、その頃には古参のフレイムヘイズが来てるから心配はいらない」
「そうなんだ」
「ああ、そうそう。そのフレイムヘイズが吉田一美に接触して「この世の本当のこと」を教える。止めるのなら早目にな」
「吉田さんが……」
　吉田さんは平井さんとは違う。平井さんは「絶対に死なない不思議な安心感」があるけれど、吉田さんは普通の女の子だ。そんな吉田さんが「この世の本当のこと」を知る事に、僕は不安を覚えた……止めなくちゃ。吉田さんを危険に巻き込む訳にはいかない。フレイムヘイズと接触させちゃいけない。
「そのフレイムヘイズは子供で、傷痕を隠すためにフードを被っていて、布で覆われたデカい長物を持っている。まあ、そのフレイムヘイズを探すよりも、吉田一美を見張った方が早いだろう。ちなみに吉田一美が「この世の本当のこと」について知ると、お前がトーチだとバレる」
　それは大問題だ。僕をトーチと知ってショックを受けるかも知れない。吉田さんまで非日常に踏み込んでしまう。それに僕を普通のトーチと思って、ショックを受けるかも知れない。普通のトーチは時間が経ったら消滅する。でも僕は「零時迷子」という宝具を宿しているから、消える事はないんだ。
「吉田一美を学校から自宅まで、送り迎えしたらどうだ？　オレはやらないけど」
「平井さんは、いいの？」
「かまわん」
　平井さんに許可をもらった翌日、登校した僕は吉田さんに送迎を申

し出た。最近、街の一部が塩になる集団失踪事件や、人がミートボールになって見つかる猟奇殺人事件が起こっている……おそらく紅世の徒の仕業だ。徒を狩る紅蓮の少女も、見当たらない日が多かった。その事件を理由に使って僕は、吉田さんと一緒に登下校する事にする。

　それにしても平井さんって、他人の目とか気にしないなぁ。授業を受ける時も登下校する時も、ずっとジャージのままだし……クラスの皆から「坂井とは別れたのか？」なんて言われても気にしない。一人で完成している。完結して、心を閉ざしている。でも僕には少し、心を許してくれているのかも知れない。

「坂井くん、明日のミサゴ祭り……一緒に行きませんか？」

「え？　吉田さん……でも僕には平井さんがいるし」

「坂井くんは平井さんと行くんですか？」

「いや、そうじゃないけど」

「じゃあ、私と一緒に行ってくれませんか？　一人じゃ寂しいと思います」

「うーん……返事は後でもいいかな？」

　もしかして吉田さん、僕が「平井さんと別れた」って思ってるのかな。クラスメイトには、そう思われているのかも知れない。訂正しようと思った僕だけれど、それは出来なかった。その時、僕はフレイムヘイズを見つける。「子供」「傷痕を隠すためのフード」「布で覆われたデカい長物」という平井さんに教えてもらった容姿だった。遠く離れた場所から見ても分かるほど、存在感のある怪しい格好だ。

「貴方は知っているのですか？」

「彼女は知らない。話なら僕が聞く」

「そうですか。用があるのは彼女の方なのですが……貴方に話を通した方が良いのでしょう」

「ごめん、吉田さん。この子と話したい事があるから、今日は此所までで良いかな？」

　戸惑う吉田さんを急がせる。そうして吉田さんが一人で帰って行く姿を見送り、僕は安心した。とりあえず吉田さんが、「この世の本当

のこと」を知る事は防げた。でも、「とりあえず」だ。このフレイムヘイズは「吉田さんに用がある」と言った。これで終わりじゃない。
「あぁ、申し遅れました。私は儀装の駆り手、カムシン。これは……」
『わしは「不抜の尖嶺べヘモット」じゃ』
「僕は坂井悠二です」
「この街を私が訪れた理由は、この街の歪みを直すためです」
（　かくかくしかじか　）
「つまり、吉田さん以外にも条件に合う人はいるんですね？　吉田さんじゃなくても」
「ええ、しかし出来る限り早く調律を行った方が良いでしょう。先日、空間震とも言える現象が起き、紅世との繋がりが断ち切られました。まあ、空間震というのは仮の名称ですが……震源地は、ここです。これ以上放って置けば、どのような異常が起こるのか予測すらできません。実際、空間震によって世界規模で「歪み」が増大しています」
「そんな事が……」
　僕は、そっと目を逸らした。
「その件で他のフレイムヘイズや、興味を引かれた紅世の徒が、この街を訪れるでしょう。何か気付いた事があれば、私に相談する事をオススメします。フレイムヘイズには過激な手段を取る者も少なからずいますから」
「分かりました。それで吉田さんには――」
「あぁ……貴方を説得するよりも、別の方を当たった方が早いでしょう」
　フレイムヘイズは吉田さんの事を諦めたらしい。その翌日、平井さんは市外へ避難した。フレイムヘイズと会って忘れていたけれど僕は、吉田さんと祭りへ行く約束をしている。フレイムヘイズの接触を防ぐためもあって僕は、吉田と一緒に祭りを見て回る。すると、どこかで存在の力が揺れ動いた。
【裏】
　御崎市から避難したオレは、隣町の漫画喫茶にいる。祭りが終わる時間になったら帰る予定だ。両親には「ミサゴ祭りに行っている」と

伝えてある。ここにオレが居るなんて誰も知らないはずだった……
しかし、なぜか「千変シュドナイ」がいる。少し前に討滅された、愛染の兄妹と一緒にいた紅世の王だ。
「ここは御崎市じゃないぞ」
「知っている。今日は貴様に会いにきた」
「意味が分からん」
「貴様の能力は厄介だからな」
ふむ……なんの事だ？　愛染の兄妹の「揺りかごの園」を弾いた事か？　それとも自動迎撃能力の事か？　それとも紅世との繋がりが切れた事か？　そもそも、なぜ千変がいる。御崎市で仕事している教授の手伝いへ行けよ。千変は戦闘能力が高く、オレに割り振られるような相手じゃない。
「それで、何のようだ？」
「貴様には御崎市から離れてもらう」
「星黎殿（せいれいでん）に連れて行く気か？」
「貴様のような奴を俺達の本拠地に連れて行けば、どうなるか分かったものではないな」
「……質問したオレが悪かった。お前が何をしたいのか聞かせてくれ」
「貴様が自在法を無効化するのは分かっている。貴様が居ると封絶を張れん。封絶を張らなければ俺達も行動が制限される。だからと言って下手に触れば、愛染の兄妹の二の舞だ。貴様は俺達からの連絡があった場合、御崎市から離れろ。貴様も戦いに巻き込まれたくはないのだろう？」
「つまり襲撃する時期を事前に教えてくれるのか。だがなぁ……お前達の行動は、だいたい分かるんだ。今日だって教授の起こす騒動から避難している訳だしな」
「ほう。その割には、俺が来ると分かっていなかったようだが」
「むぅ……できれば避難費用は出してもらいたい」
「教えてもらえるだけ有り難いと思え。さっそくだが、明後日まで御崎市に近付くな」

「明日じゃなくて、明後日までか」
本来ならば今日の夜、教授が撃退されて終了だ。しかしアニメ版は第一期の終盤で、翌日に敵の本拠地が転移してくる。あの戦いで封絶を張れなければ、フレイムヘイズにとっても紅世の徒にとっても大迷惑だろう。もちろんオレも、そんな危険な場所に居たくない。
「まぁ、いいか。上手く行けば、坂井悠二の望みも適う。でも親を説得したいから協力してくれ」
「断る」
「親を説得できなければ、外泊は不可能だ」
「自分で何とかしろ」
千変は帰ろうとする。その千変のスーツをオレは掴んで引き止めた。親を説得しなければ無理だと言っているだろう。避難費用を出せないのなら、そのくらいは協力してほしい。こんな事をしたら攻撃されるかも知れないけれど、それならば最初から攻撃を仕掛けていたはずだ。
「オレの考えたセリフを棒読みするだけでもいい。やってくれたら天目一個の正体を教えよう」
「……まあ、その程度ならば良いだろう」
やってくれるらしい。オレは自宅に電話をかける。坂井悠二の家に泊まるという設定だ。坂井悠二の父親は海外で仕事をしている。オレの両親も、坂井父と会った事はないはずだ。なので千変は、坂井悠二の父親という設定にする。千変シュドナイは電話を片手に、オレの書いたメモの内容を棒読みした。

「坂井悠二の父親だ。平井ゆかりは預かる。俺の息子には指一本触らせない」
「敬語で書いてあるだろ。ちゃんと読めよバカやろう」
【表】
「教授が来る」とミステスが騒いでいる。また、あの人間から聞いたらしい。他の奴ならば兎も角、あの人間が言った事だから判断に困った。狩人の宝具に関するヒントでウソは言っていない。あのヒント

が無ければ、より苦戦していただろう。でも、あの人間にはフレイムヘイズを殺した疑いが掛かっていた。
「どうするの、アラストール」
『実際に事が起こらなければ対処は出来ぬ。どこに頭があるのかも知れぬ情報に踊らされるべきではない』
本当の問題は「教授」を倒した後に起こった。零時迷子を宿したミステスが、徒の集団である「仮装舞踏会」に奪われる。その前にミステスを破壊しようと試みた私だったけれど、あと一歩届かず怪我を負う。私の炎の剣はミステスが持っていた「火除けの指輪」で防がれた。贄殿遮那（にえとののしゃな）があれば届いていたのに……贄殿遮那を奪った、あの人間の顔を思い出して気分が悪くなった。
今この街には、私を育てたヴィルヘルミナがいる。街の一部が塩化して、フレイムヘイズが殺された事件。その後片付けをするために来たからだ。それと調律のために訪れた「儀装の駆り手」もいる。それと少し前の地震に引かれてやってきたフレイムヘイズもいた。
フレイムヘイズは一つの街に1人が居れば良い方だ。こんな風に、1つの街に4人も集まるなんて異常事態だった。でも、それ以上に異常な事が起こっている。空に浮かぶ「仮装舞踏会」の本拠地から、存在の力が尽きる事なく溢れ出ていた。早く止めなければ、この地が存在の力で溢れてしまう。
でも、私は素手だった。武器がなかった。贄殿遮那は人間に奪われた。炎の剣は使えるけれど、やはり実体が無いのは厳しい。贄殿遮那さえあれば、ミステスに届いていたのに……！　そう思っていた私は屋根の上から、庭に落ちている物を見つける。拾ってみると、それは大剣型の宝具だった。存在の力を流すと、赤い波紋が浮かび上がる。
「これって……？　なんで、こんな所に？」
『我等のいぬ間にミステスが拾ったのであろう。狩人の住処から持ってきたのやも知れぬ』
ちょうどいい。これを使おう。贄殿遮那には劣るけれど、無いよりはマシだ。それを持って他のフレイムヘイズと合流した私は、敵の本拠地へ向かう――なんやかんやあってミステスを取り戻した私は、封

絶内に溜まった存在の力を消費するためにアラストールを顕現させた。

【表】

紅世の徒に誘拐された時は紅蓮の少女に殺されるかと思い、アラストールが顕現した時は死ぬかと思った。でも、「火除けの指輪」のおかげで助かった。今、僕の中には膨大な存在の力がある。でも、「転生の自在式」の起動条件が分からなかった。なんやかんやあって存在の力を扱えるようになったけれど起動しない。どうやら条件を満たさなければ起動しないように改変されているらしい。屍拾いラミーさんが言ってたっけ。

その翌日、平井さんが避難先から帰ってきた。平井さんを見ると、日常に帰ってきた気がする。吉田さんも紅世に関わる事はなかった。そういえば紅世の徒のせいで、祭りの途中で逸れてしまったから後で謝らないと……ああ、僕は守れたんだ。もう吉田さんの送迎をする必要もないだろう。その旨を僕は吉田さんに伝えた。

「坂井君……もしかして坂井君が私の送り迎えをしてくれていたのは、ゆかりちゃんに言われたからなんですか？」

「うん、そうだよ。最近あぶないから送り迎えしてやれって」

そう言うと、吉田さんの様子がオカシクなった。青白い顔になって、ガタガタと震える。僕が声をかけると泣き出して、僕から逃げて行く。その尋常ではない様子に、僕は訳が分からず驚いた。本当に、どうしたんだろう？　クラスメイトにも「吉田さんに近付くな」と言われて拒絶される。その放課後、僕は平井さんと一緒に下校していた。

「そうだ。平井さん、転生の自在式の起動条件が分からなかったんだけど……」

「ああ、それか」

平井さんは僕に顔を寄せる。そして何気ない仕草のまま、僕に唇を付けた。僕の唇に、平井さんは口を付けた。掠るように、触れた。突然キスされた僕はパニックに陥る。すると僕の体は光に包まれた。一瞬の後、いつもと変わらない姿に戻る。胸に見えていた灯火（トー

チ）も、そのままだ。なにも変わっていない。
「え？　え？」
「おめでとう、坂井悠二。これで、お前は人間だ。まあ正確に言うと、人間に戻ったのではなく、この世にトーチとして定着したのだがな。これで零時迷子に頼らずとも存在を維持できるぞ」
無表情の平井さんが、やる気なそうにパチパチと手を叩く。それでも嬉しかった。人間に戻れた僕は涙を流し、平井さんが祝福する。嬉しくて、嬉しくて、僕は平井さんを抱き締めた。平井さんが僕の腕から脱出しようとジタバタと暴れるけれど、本気で逃れようとはしていない。やがて諦めたのか平井さんは大人しくなって、僕の背中をポンポンと叩きながら側にいてくれた。ずっと側にいてくれた。

万条の仕手ヴィルヘルミナ

人間に戻った坂井悠二に、オレは捕獲されていた。まあ、人気のない公園だから大丈夫だろう……このまま押し倒されたりしないよな？　それは、ちょっとドキドキするぞ。恥ずかしくて殴っちゃうかも知れない。キスしてしまったからな……いいや、キスと言っても掠る程度だ。

「このような場所に居るとは、わざわざ呼び出す手間が省けたのであります」

その声を聞いて、オレは坂井悠二を突き飛ばした。目標は坂井悠二だろう。オレまで巻き込まれるのは困る。しかし、フレイムヘイズから飛び出た白い帯は、オレの目の前で弾けた。ついでにオレの側にいた坂井悠二も無事だ。突き飛ばしたから地面に倒れている……まるでオレが坂井悠二を守ったように見えるな。

「貴方が「炎髪灼眼の討ち手」の言っていた女でありますか」

「気を付けてヴェルヘルミナ、あいつ見えない何かで物を消すわ」

仮面女に炎髪灼眼も一緒か。ところで炎髪灼眼は、なぜ「吸血鬼」を持っている？　それは愛染の兄から奪った大剣型の宝具だ。庭に置いてあった物を「どうせ坂井悠二は存在の力を扱えない」と思って使っているのか。だが、それをオレに向けるのは間違いだ。なぜならば、それはオレが坂井悠二にプレゼントした物なのだから。

「坂井悠二、吸血鬼を炎髪灼眼に譲ったのか？」

「え？　してないよ」

「ほう、つまり炎髪灼眼は持ち主の許可を得ず、勝手に人の物を盗んで、それを我が物のように使っていると。おまけに、その剣で、その持ち主に刃を向けている」

「「仮装舞踏会」に捕まっていたお前を助けたのは、誰だと思っているの？」

「とんだ英才教育を施したものだな、万条の仕手」

『問答無用』

「炎髪灼眼の討ち手、惑わされてはいけないのであります」

仮面女から無数の白い帯が舞う。オレは坂井悠二を引き寄せた。坂井悠二は存在の力を扱えるようになったと聞いている。やっと「使える」ようになったのに壊されるなんて、もったいない。坂井悠二にはオレを守って貰わなければならない。これからだって彩飄フィレスやら懐刃サブラクやら……あれ？

千変のいる「仮装舞踏会」から事前に通知されるから、その時に避難すればいいか？　いいや、紅世の徒を信用する事なんてできない。坂井悠二を殺して「零時迷子」が無くなれば、御崎市が戦場になる事はないか？　いいや、紅世の徒がいる限り、絶対に安全じゃない……だから守ろう。

自動迎撃機能が動き出す。無数の白い帯と対抗するように、オレの影から黒い腕が伸びた。それに触れた白い帯は裂けて、裏返る。裏返っても大して見た目は変わらなかったけれど、失速して地面に落ちた。黒い腕が地面に触れれば裂けて、土が入れ替わる。木に触れれば、幹の内側が外側になって、外側が内側になった。

今回は大人しい。その理由にオレは気付いていた。坂井悠二が近くにいると威力が下がる。なぜかは分からない。坂井悠二に、オレの力を抑える働きでもあるのか？　まあ、「蹂躙の爪牙マルコシアスのフレイムヘイズ」が襲ってきた時のような、辺り一面吹き飛ばす威力が出ても困る。この威力で、ちょうどいい。

しかし、威力が下がったから仕留め切れない。オレと坂井悠二を覆うように黒い腕は立ち昇る。その腕は、すでに１００を越えるほど増えていた。それらが仮面女と炎髪灼眼だけを狙っていれば話は早い。ところが黒い腕はオレ達の周囲にある物を、無差別に襲っていた。使えねぇ……。

「ダメだよ、平井さん。これじゃ街が壊れる」

涙を拭いた坂井悠二がオレを止める。いや、オレが操作してる訳じゃないんだけど……と思っていると。黒い腕が薄くなって行く。実体を失って消滅した……おい、オレの言う事は聞かないのに、なんで坂井悠二の言う事は聞くんだ？　しかし、裏返しになった大地や木や電灯は元に戻らない。

「坂井悠二。今日から、お前の家に泊まるぞ」
「それは、あの2人が襲ってくるから？」
「オレが居れば守れる」
「うん……ごめん」
　坂井悠二は落ち込んでいる。なにも出来なかった事で、自身の無力を感じているのだろう。炎髪灼眼に襲われた事にショックを受けているのかも知れない。とは言っても、ちょっと坂井悠二が強くなった程度で勝てる2人ではない。でも、まあ、坂井悠二が強くなるのはオレにとっても良い事だろう。
「強くなれ、坂井悠二。オレを守れるくらいに」
「……うん、強くなるよ。平井さんが戦わなくてもいいくらいに」
　マジで!?　ラッキー！
【表】
　僕の家に平井さんが泊まる予定だったけれど逆になった。平井さんの家に、僕がお邪魔している。僕の家には母さんしかいないから、平井さんと2人きりになる時間を心配されたようだ。平井さんと一緒に住めなくなると僕の命に関わるから、平井さんの家族に認められるように頑張った。
　登下校する時も一緒で、お手洗いへ行く時も一緒だ。いつでも一緒な僕と平井さんは、ラブラブなカップルに見えるのだろう。実際は、平井さんは何時ものように無表情だ。僕のために、そんな事にも耐えてくれている。そんな平井さんのためにも僕は、早く強くなりたかった。
「そろそろ清秋祭か。また紅世の王が来るぞ」
「今度も厄介な相手なの？」
「彩飄（さいひょう）フィレス。お前の中にある「零時迷子」を作った紅世の王だ。元々、零時迷子は「彩飄」が恋人と共に作ったものでな。その恋人は現在、零時迷子の中に封印されている」
「僕の中に？」
「最初に来るのは偽物だ。後から来る本体は、恋人を取り戻すためならば手段は選ばない」

「そうなんだ……ねえ、平井さん。その人に零時迷子は返せないのかな？」
「ああ……いいんじゃないか。そうしよう」
その口調に違和感を覚えて、僕は平井さんの顔を見る。いつものように無表情だ。でも、ずっと見ていると何となく感情が読み取れる……ああ、これは何か企んでる気がする。いったい平井さんは、なにを企んでいるんだろう。僕は知りたかったけれど、平井さんは教えてくれなかった。
そして「清秋祭」が始まる。仮装パレードに出た僕と平井さんは、表彰式に出なかった。祭りの会場から離れた人の少ない場所へ、川原へ向かう。そこで僕と平井さんは手を繋ぎ、彩飄フィレスの来訪を待っていた。そして、とつぜん強風が吹いたと思ったら止んで、緑色の髪をした女の人が空から降ってきた。
「あっ」
「ん？」
そして、そのまま地面に落ちる。少し跳ね上がって、また地面に落ちた。そのまま女の人は動かない。まるで投身自殺をしたかのような有り様だ。いったい何があったんだろう……そう思って僕は平井さんを見た。目を逸らされた。とりあえず平井さんが女の人に近寄って声をかける。
「おい、零時迷子を取りに来たんだろう。「万条の仕手」と「炎髪灼眼の討ち手」に狙われてるから、取り出すなら早くしてくれ」
「ヨーハン……」
平井さんが彩飄フィレスを無理矢理に起き上がらせる。そしてヨロヨロと歩くフィレスさんを僕の前まで持ってきた。まるで平井さんの操り人形だ。こんな調子で大丈夫なのかと思ったけれど、フィレスさんはフラフラと僕の体へ手を伸ばす。そして、その手がズブリと僕の中に沈み……
「アアアアアアアアアッ!!」
僕の中から飛び出した銀色の腕が、フィレスさんを貫いた。それは僕から生まれるように、少しずつ外へ姿を現す。銀色の西洋鎧、その

上半身が僕から飛び出ていた。銀色の炎が噴き上がっている。まさか……このゴツい奴が、零時迷子の中に封印されていたフィレスさんの恋人!?

「平井さん！　これは！」

平井さんを見て、僕は息を止めた。平井さんは冷たい目で僕を見ている。少しも慌てる事なく、フィレスさんにも僕にも気付かれないように、静かに後退している。平井さんは、こうなるって分かっていたんだ。フィレスさんに零時迷子を返す気なんてなかったに違いない。これはフィレスさんの恋人なんかじゃない。もっと得体の知れない「なにか」だ。

「フィレス、これは！」

「お前達いったい何をしているの！」

僕等を見張っていたのであろう、フレイムヘイズの2人が飛び込んでくる。紅蓮の少女が僕を切り捨てようとしたけれど、銀色の炎を吹き上げる西洋鎧に防がれた。銀色の炎……そうか。こいつは紅世の徒だ。でも、なんで紅世の徒が僕の中に？　こんな西洋鎧の徒を見た事はなかった。

そこへ、さらに新手が来た。空から降ってきた無数のブロックが、僕を取り囲む。小さな少女と共に、明らかに人間ではない翼の生えた男が現れた。その小さなブロックの群れは、嵐のようにグルグルと回り、フレイムヘイズを近寄らせない。その間に小さな少女が、大きな杖で僕の胸を突いた。

「お静まりください」

僕の中に西洋鎧が押し戻される。そして少女は、僕の胸をトンっと突いた。そうして助けてくれたのかと思ったら、少女は僕を分解しようとする。やっぱり敵だったらしい。少女の狙いは零時迷子なのだろう。フィレスさんの様子を見る限り、通常の方法で取り出せないのは明らかだ。

「そう、この距離がいい。遠過ぎず、近過ぎない。標的に坂井悠二が含まれていれば万全だ。無差別攻撃ならば、坂井悠二以外を倒してしまえばいい」

その瞬間、全てが打っ飛ばされた。小さな少女も翼の生えた男も、僕を隔離していた無数のブロックも、そのブロックを打ち破ろうとしていたフレイムヘイズの2人も、瀕死の状態だった彩飄フィレスの分身も、なにもかもが理不尽に打っ飛ばされた。あらゆる人や物が地面に倒れ伏した中、平井さんだけが立っている。

「これで零時迷子に刻印が刻まれた。分かりやすく言うと発信機だ。お前を殺して無作為転移を起こせば、零時迷子は「仮装舞踏会」の物になる。だからと言って取り出そうとすれば門である「戒禁」と門番である「暴君」が邪魔をする。フレイムヘイズは「仮面舞踏会」から零時迷子を守るために、お前を守るしかない」

そう言って平井さんは僕を抱き上げる。自分で歩こうと思ったけれど、平井さんは走り出した。とても僕には出せない超人的なスピードだ。フレイムヘイズや紅世の徒を置き去りにして、その場から逃げ出す。やっぱり僕は、平井さんに捕まっている事しかできなかった。

【裏】

オレは坂井悠二を通して、フレイムヘイズに情報を流していた。しかし今は、フレイムヘイズが坂井悠二の破壊を企てた事で、絶交状態に陥っている。次に来るのは「懐刃サブラク」だ。優秀な自在師である「蹂躙の爪牙マルコシアスのフレイムヘイズ」が居ないので、「懐刃サブラク」の攻略は難しい。だって御崎市を空に浮かべられないからな。

「まず「懐刃サブラク」の前に中ボスが出る。分身できる徒と、砲撃手の徒だ。奴等は封絶内に標的を誘き寄せ、大火力の砲撃で封絶ごと吹き飛ばす。砲撃手は気配を絶つ宝具を持っているから目視で探すしかない。お前は紅世の王ですら比べ物にならないほどの存在の力を持っているから、その力を込めて殴れば分身できる方は吹き飛ばせるだろう」

「あの子に持って行かれた「吸血鬼」があれば良かったんだけど……」

「あんなデカい剣、街中に持って行ける訳ないだろう。それと問題の「懐刃サブラク」だ。こいつの攻撃を食らうと傷が治らなくなる。だが、それは「万条の仕手」が解決方法を持っているだろう。あと、こ

いつは体を地面に浸透させている。本体に見えるのは人形のような物だ。だが、体から人形を切り離せば倒せる。倒すのは人形の方だから間違えるなよ。具体的に言うと、地面を切り離せば倒せる」
「地面を切り離すって、そんな事できるの？」
「無理だ、諦めろ。まあ、地面ごと滅却できるような技があれば別だがな……たとえば「炎髪灼眼の討ち手」は、紅世の徒一匹を生け贄に捧げれば、神威召喚という秘法を行使できる。あれを使えば、街ごと焼却できるだろう」
　そして分身できる紅世の徒が現れる。オレと坂井悠二は引き離され、オレは市外へ移動させられた。そして漫画喫茶で紅世の徒と共に暇を潰す……まあオレは、わざわざ危険な場所に戻ろうなんて思わないからな。てっきり小さな少女もとい「頂の座へカテー」を打っ飛ばした事に怒った「千変シュドナイ」が、秘蔵の宝具を持ち出して殴り込んでくる……なんて思っていたけれど、そんな事はなかった。その後、オレは解放された。交通費は支給されないらしい。
　御崎市へ戻ると、坂井悠二は無事だった。その姿を見て安心する。その隣には「万条の仕手」がいた。しかし「炎髪灼眼の討ち手」の姿はない。あの赤い少女の姿はなかった。死んだのか？　なんて思いながら2人に近付くと「万条の仕手」が、オレに白い帯を差し向ける。
「前から疑問に思っていたのであります。貴方は「仮装舞踏会」と繋がっているのでありましょう」
「違う……とは言い切れないな。なぜ、そう思う？」
「貴方は我々にミステスを通して、重要な情報を提供したのであります。おかげでフィレスの協力と「炎髪灼眼の討ち手」の切り札を用い……懐刃サブラクを討滅できたのであります」
　やっぱり死んだな。
「しかし、そんな貴方が、なぜ五体満足に生きているのでありましょう。そのような情報を漏らした貴方を、「仮装舞踏会」が放って置く訳がないのであります」
「それはオレが「仮装舞踏会」を退けるほどの力を持っているからだ。「頂の座へカテー」と「嵐蹄フェコルー」を倒した事は知っているだろ

う。お前達ごと倒したからな」
「貴方は何時も安全な位置に居るのであります。それが私達に情報を渡したように、「仮装舞踏会」へ情報を流したからだとすれば……」
「ゴチャゴチャと面倒臭い奴だな。つまり、お前は収まりが付かないんだろ？　大切に育てた炎髪灼眼が死んで、八つ当たりしたいんだろ？　我慢するなら我慢する、我慢できないのなら掛かって来い」
「私は……」
　すると「万条の仕手」は仮面を被る。表情を隠す仮面で、その心を隠した。まるで自分を見ているようで嫌になる。きっと無表情なオレに「万条の仕手」も同じ事を思っているのだろう。泣けば良かった。叫べば良かった。それでも世界を壊す訳にはいかないから我慢していた。心を押し殺していた……だが、本当に我慢する必要はあったのか？　世界を壊しても良かったんじゃないか？
「来いよ、臆病者。仮面〈ペルソナ〉なんて捨ててかかってこい」
　「万条の仕手」がオレに襲いかかる。白い帯がオレに触れて弾かれる。それだけで十分だった。次の瞬間、白い帯と共に「万条の仕手」はパシャンと弾けた。血や肉を溶かしたような液体が地面に落ちる。やがて桜色の炎が噴き上がり、この世から液体は消えた。「万条の仕手」と契約していた「夢幻の冠帯」は顕現しなかったか……。
「どうして……平井さん！　殺す事なんてなかったじゃないか！　ちゃんと話し合えば……！」
　坂井悠二がショックを受けている。そうか……フレイムヘイズが死んでもオレは何とも思わないのだがな。綺麗とも汚いとも思わない。ただの肉を溶かした液体だった。オレにとっては何の価値もない、遠回しの自殺だ。きっと坂井悠二は「万条の仕手」や「炎髪灼眼の討ち手」と一緒に敵と戦って共感していたのだろう。大変だな。彩飄フィレスも坂井悠二もとい「零時迷子」を庇って死んだのかも知れない。大切な零時迷子に変な自在式が打ち込まれるのを、フィレスが見過ごす事はないだろう。
　そういえば、ここに居るのはオレと坂井悠二だけだ。「弔詞の詠み手」は塩になって死んだ。「炎髪灼眼の討ち手」は捨て身の技を使って

死んだ。「万条の仕手」はスープになって死んだ。いつの間にやら、こちら側のフレイムヘイズは一人も残っていない。坂井悠二の側にいるのは、ただの人間であるオレだけだ。

あーあ、みーんな死んじゃった

おわり

クリスマスの夜、オレと坂井悠二はデートをする事になった。誘ったのは坂井悠二だ。ジャージで行ってはダメなのだろうか。ダメなのだろうな……困った。そうなると女子制服を着るしかない。オレはジャージと制服を見比べて悩んでいた……止めよう。制服なんて着たって、今さらな話だ。もうジャージで良い。

そんな訳でオレはジャージを着て、待ち合わせの場所へ行く。そこでオレは目立っていた。ジャージだから超目立っていた。坂井悠二は見慣れているから、ジャージなオレに特別な反応は返さない。いつも通りの服装だ。これで「似合ってるよ」なんて言われても反応に困る。

いろいろと見て回って、なんやかんや遣って、デートも終わりの時間を迎える。すると坂井悠二は話したい事があると言ってきた。本題は、それか。この坂井悠二は蛇と共に歩む事を決めたのか否か。オレの思考は、そちらに切り替わる。すると、いつものオレが戻ってきた。

「じつは少し前から不思議な夢を見るようになって……」

「「祭礼の蛇」の代行体になる事なら知ってる。省略しろ」

「しばらく帰って来れないと思う」

「この街が儀式場になるから安心しろ」

「そうなんだ……」

坂井悠二のセリフを次々に潰して行く。どう話そうか考えてきたらしい坂井悠二はショボーンとしていた。まあ、こいつの事だから、オレが全て知っているパターンも想定していたはずだ。大人しく話を聞いても良かったのだけれど面倒だった。坂井悠二の話は、それで終わりらしい。

「家まで送るよ」

「いらん。さっさと行け」

「少しでも平井さんと一緒に居たいんだ」

「時間の無駄だ」

家まで送って行こうとする坂井悠二の言葉を、次々と切り捨てる。坂井悠二が何と言っても、オレは意地でも動かなかった。やがて坂井悠二は諦めたのか、トボトボと歩き出す。オレは背を向けて、坂井悠二を見送る事はしなかった。正面の夜景を見ながら、背後の足音を聞く。

「それじゃあ、平井さん。またね」

「ああ、さよならだ。坂井悠二」

オレは振り返った。

そこに坂井悠二の姿はない。当たり前か。すでに坂井悠二は行ってしまった。だが、決戦の地はココなのだから、すぐに帰ってくる……そう、すぐに帰ってくる。でも、その時が待ち遠しかった。蛇の代行体となった坂井悠二なら、少しはオレの役に立つだろう。そんな事を考えていると、ポツリポツリと雪が降り始める。さっさとオレも帰るか。

でも、オレは動けなかった。体が重い。立ち上がろうという気力が湧かない。ちょっと疲れているのかも知れない。オレは坂井悠二が去った時のまま、そこから動いていなかった。何の意味もない景色を、何の意味もなく眺めている。少し、おかしいな。オレらしくもない。

またオレは振り返った。

やはり坂井悠二はいない。当たり前だ。今さら戻っては来ない。しかし、どうせ儀式が行われる際に帰ってくる。なんの心配もいらない。オレは坂井悠二を心配していない。ただ不安なだけだ。坂井悠二が居なくなって、オレは不安を感じていた。坂井悠二が居なくなったのに、どうして不安を感じている？

普通の徒は来るかも知れないけれど、零時迷子を狙う「仮装舞踏会」の徒は来ない。少なくとも儀式の日まで平穏と考えていい。少なくとも自分から関わろうとしない限り、紅世の徒と関わる事はないだろう。坂井悠二が居なくなって、安全になったんだ。そして坂井悠二が儀式を完遂すれば、もはや紅世の徒で悩まされる事はないだろう。

「……あれ？」
ポタリと涙が流れ落ちる。オレの涙だった。訳が分からない。オレは何で泣いている？　オレにとって不利益な事なんて何も無いのに、なぜオレは悲しんでいるのだろう。ズキズキと胸が痛む。オレが苦しんでいる。訳が分からない内に感情が零れ落ち――ピシリと空間にヒビが入った。
もしかして坂井悠二と離れたからか？　だから能力が暴走している？　でも前は、こんな事はなかった。少し前まで、ちゃんと一人で制御できていた。坂井悠二と出会う前から、あの教室で話しかけられる前から、オレは一人で感情を抑えていた。感情で暴発しないように、能力を抑えていた。
でも実際に能力を制御できない。オレの意思と関係なく、涙がボロボロと零れて行く……いいや、違う。暴走しているのは能力じゃない、オレの感情だ。感情が暴走しているから能力を制御できていない。もしかして「オレの能力を制御できる坂井悠二」と一緒にいる間に、オレの制御能力が鈍ってしまったのかも知れない。
……オレの能力を制御できる坂井悠二？
違う。そうじゃない。坂井悠二に制御されていたのはオレの感情だ。でも坂井悠二と一緒にいる間は、心を揺れ動かされる事が多かった。逆に、能力が暴走しているはずだ。でも実際は威力が下がっていた……威力が下がっていた？　違う。あれは能力が安定していたんだ。
坂井悠二と一緒に居たから能力が安定していた。でも、坂井悠二と出会う前だって、一人でも能力は安定していたんだ。うっかり誰かを殺すなんて事はなかった……違う、違う。そうじゃない。そもそも感情を抑えて、能力の暴走を抑制していた。発動すれば世界の危機だと考えて使っていなかった。
それと同じ事をすればいい。坂井悠二に出会う前と同じ事をすればいい。無表情で、他人と関係ない振りをして、誰とも関わらなければ良い……でも、ダメだった。涙が止まらない……ああ、そうか。オレは坂井悠二が居なくなって「寂しい」んだ。寂しさを知ってしまっ

た。利用するつもりで近付いたのに、いつの間にか心を囚われていた。

ピシリピシリと空間に亀裂が入る。

完全な真円で、一人で完結していれば、心が欠ける事はなかった。でもオレは坂井悠二と関わって、オレの心に坂井悠二を埋め込んだ。その坂井悠二が居なくなって、完全な真円が欠けてしまった。オレの心が欠けてしまった。その穴から全体に、ヒビが入って行く。

欠ける事から欲望は始まる。オレは欠けてしまった。坂井悠二を欠いてしまった。そうか……オレが悲しいのは坂井悠二が居ないからだ。だって、もはや坂井悠二はオレの心の一部なのだから。一瞬だって離れてはいられない。でも欠けてしまった。坂井悠二はオレの側から去ってしまった。

悲しくて仕方がない。

抑圧していた感情が、世界に漏れる。オレの感情が世界に流出して行く。オレの感情に耐え切れず、世界がヒビ割れて行く。気付いてみれば、辺りは大騒ぎになっていた。道路が割れて穴が開き、建物が割れて崩れ落ちる。無数のヒビが世界に入り、空が割れたガラスのようにズレていた。大地が震えている。無数の傷を付けられて、地層が崩れて行く。

でも、止められない。感情が止まらない。今ここに居るのは感情的なオレだった。かつてオレは男でもあり、女でもあった。男にもなれず、女にもなれず、釣り合っていた。でも坂井悠二が、オレの男の部分を補って、バランスが崩れた。今ここに居るオレは、オレじゃなくて、男としてのオレじゃなくて。

――私　なんだ

もう止まらない。元には戻れない。

世界が壊れる。砕け散ろうとしていた。男としてのオレならば兎も角、女としての私には何も出来ない。無力で臆病な私には何もできなかった。立ち上がる事すら出来なかった。ただ泣いて、泣き続けて、世界の終わりを待つしかない。坂井悠二に会いたかった。その矛

盾している一心で、私は世界を壊す。
　そんな私を誰かが抱き締めた。こんな無様な私を誰かが抱きしめた。私の後ろから、私に触れた。この温もりを私は知っている。人の温もりだ。それは私の心に流れ込み、欠けていた穴を埋める。顔も見えないけれど、声も聞こえないけれど、その温もりが坂井悠二なのだと私は知っていた。
「ゆうじぃ……」
　涙声で、情けのない声を出す。救いを求めて声を上げた。私の声は世界に広がって、世界の崩壊を加速させる。これまでに無いほどの感情の発露は、世界を癒すどころか破滅の後押しとなった。助けてほしい。私を助けてほしかった。もはや感情は私の制御を離れて、一人歩きしている。
「聞き忘れた事があってさ……平井さんって、どこまで知ってるのかな？」
　私の答えは言葉にならなかった。泣き声で言葉にならない。涙が滲んで坂井悠二すら見えない。ジャージの袖で涙を拭っているけれど、すでに濡れてビチョビチョになっていた。こんな顔は見られたくない。こんな姿を坂井悠二に見られたくなかった。でも、寂しくてたまらない。坂井悠二が居なくなるのは嫌だった。
「首を振ってくれるだけでいいよ。平井さんは全部知ってるの？」
　私は首を縦に振った。
「そっか……じゃあ、僕は平井さんを連れて行かなくちゃいけない。平井さんから情報が漏れたら大変だからね」
　それは大変だ。もしも私からフレイムヘイズに情報が漏れたら大変だ。これは坂井悠二に誘拐されて、監禁されるしかない。でも、そんな事を言われたら嬉しくて死んでしまう。感情が溢れて、世界が壊れてしまう。坂井悠二が側に居るのに、私の能力（感情）が止まる気配なかった。
「もう大丈夫だよ、平井さん。顔を上げて」
　坂井悠二が私を抱き締める。私の心臓がドキドキと跳ねる。でも、落ち着けた。欠けていた私の半身が戻ってきた。それは私の半身な

のだから、もう切り離せない。私も坂井悠二に手を伸ばし、その体を抱きしめる。夢でも幻でもなく、それは確かに坂井悠二だった。

「ほら、平井さん。周りを見て」

坂井悠二に促されて、私は周りを見る。すると、なぜか花畑になっていた。割れた道路や、崩れ落ちた建物の瓦礫を埋め尽くすように、見渡す限りの景色が花畑になっている。空を見上げてもヒビ割れはなく、青空が広がっていた……青空？　いつの間にか夜から昼になっている。

それは私が作り出したものだった。私の心を反映するように、世界に明るさが戻る。雪が降っていたはずなのに、春のように温かくなっていた。そうか。坂井悠二がいるからだ。魔法を制御するために必要なものは人を想う気持ちなのだと、いつかの誰かが言っていた。

私は坂井悠二を抱きしめる。坂井悠二も私を抱きしめた。もう離れない。離れたくない。もしも坂井悠二が私の下を去るのならば、世界が壊れても構わない。私にとっての世界は、坂井悠二だった……坂井悠二の顔に、私の顔を寄せる。目を閉じて、息を止めた。貴方が欲しいと私はささやく。そして――、

生まれて初めての『誓い』を交わした

ＥＮＤ